開場前の虔まじい新聞雜誌の人氣は、開場後、現金と引替への際は、不拂手形となつた額高が多く、唯紐育在留の露國人が主として觀客棚を充してゐた、從つて五週間の約束が三週間に短縮さゝるといふ結果が生じたが、自分の觀た眼に珍らしく、又夫人の特技を最もよく發揮し得たと思はれるのは、夫人が眼舌で演じた、母國土着の劇である、即ち一は、オストロウスキーの『自然兒』他の一は、ゴルキーの『太陽の兒』である、今その梗概を叙して見やう。

（その一）『自然兒』の梗概

▲第一齣　場面はアシユメチエフの田舍の邸内、背景は綠樹の茂みで、唯石の欄干丈けで、邸内の一部といふ意を現はしてある。

○アンキサンダー、アシユメチエフは、巴里の住居から、此の田舍の母の家に歸つて來て逗留してゐたが、田舍の閑靜なのにもう飽々して、歸らうと云ひ出

すのを、母は引留め、アシユメチエフの妻にも、自分と共に、力を添えて、引留めてくれと頼む、三人、庭内に入り來りて、椅子に腰を卸して、この一條の對話から、劇が始まる。

○アシユメチエフはもう白髮頭をした、善い加減な老爺さんであるが、肉附の善い、血液の循環の盛んな、老少年と云つた樣子に見える。

○妻のマリア、ペトロウナは、富商の娘で、結婚して五ヶ月目に、夫とは別れた同樣、過去七年の間に、母の處へ夫が金の無心に來る時に、顏を合せてゐる丈である、かく普通は、夫の母と同棲して家事を取仕切つてゐる、歳も左程老けてはゐぬが、アレキサンダーは、妻の家庭的執着心が一體氣に入らぬのである。

○三人が話してゐる處へ○ヅウバレフといふこの土地の管理人が入つて來る、アレキサンダーは、林を賣却して了ひたいと云つて、ヅウバレフにその處分方

を相談する、ヅウバレフは、實却の不利を云つて諫める、對話の中に、アレキサンダーは、まだ小兒であつた時に見知つてゐる汝の娘のヴァーヤは何うしたかと對ねる。

○ヅウバレフは、娘の行狀が氣に喰はぬ、折角、一人の青年を見附けたので、結婚させやうとすると、娘が反抗して聞かぬので、困つてゐるなどいふ、ヅウバレフが去つた後、マリーは、母を慰めるために、留つて居てくれと說き、夫の足を引留める手段として、若い娘のヴァーヤを近昵にして、淋しさを紛らすやうにせうと思ひ立ち、遙にその影を林の間に認めるので、ヴァーヤを呼ぶ。

○ヴァーヤは即ち、コミザーチエフスキー夫人が扮してゐる、支那婦人の着るやうな袖の濶い、紅い笹緣を取つた服を着け、髮は後へ下げて、眼の活々した、いかにも活潑な、輕快な、自由な、野の鳥のやうな少女で、突拔けたやうな高い聲を上げて、一方の林間から駈け出して來る。

○マーリーは握手して、アレキサンダーを慰めてくれと云ふ、ヴァーヤは頷き、父の押付婿が忌で〳〵ならぬなど〳〵云ふ、マーリーは母と二人で外づして了ふと、ヴァーヤは馴々しく、アレキサンダーと握手し、ヴエルシンスキーとの婚約を破るやうに、父へ談じ付けてくれといふ。

○アレキサンダーは、この自然兒のヴァーヤを一見して深いインプレションを受た、娘の父へは自分からよく說得してやると誓ひ、ヴァーヤに羞恥む事はない、も少し打明話しをしてくれと肩をたゝき『こんな新鮮な、若い、靈魂に觸れるのは、何んとも云へぬ愉快だ』といふ。

○アレキサンダーは『これは自分の野人だ』と呼び、二人が互に親密になる、白頭の老成人が、野性的の少女を相手にして、若やぎ切つてゐる光景が妙である。

○母と、妻とが歸つて來ると、アレキサンダーはすつかり機嫌を直して了

ひ『私が茲處にゐるのを淋しがつてゐたやうに見えたか？少ともそんな事は無い、この夏中、私は茲に逗留するよ』

▲第二齣　ヅウバレフ、の家、後方の戸口から廣野が見える、室内はからりとして隅々の三方に卓が三脚、例の湯沸瓶が据えて、湯氣が出てゐる、凡て質朴な農家の生活の樣子が見える。

○アレキサンダーの妻のマリーは、自分の夫が狂氣のやうになつて、ヴアーヤを愛してゐると語る、ヴアーヤは、自分もアレキサンダーが好きだと憶面もなく云ふ。

○その中アレキサンダーは入來る、ヅウバレフや、獨身者の隣人のボエフや、地所持のマルコフや、ヴアーヤの許婚のヴエルシンスキーなどが皆入來つて、卓を圍み、何彼と雜談して、やがて歸つて行く、唯後にはヴエルシンスキーと、ヴアーヤとが居殘る、ヴエルシンスキーは、ヴアーヤに向ひ、何か用事が

あるので自分を呼んだのかと問ふ、この男子、一見變性男子のやうな、至つてのろい、間の抜けた、鈍な人間である。

○ヴアーヤは、結婚するのが忌だと云ひ、汝から、結婚せぬと決心した事にして、落着を付けてくれといふ、ヴエルシンスキーは呆れ顏で失望し切つたが、質朴に、では破約の事にせうと云つて立去る。

○次の室で樣子を窺づてゐたアレキサンダーが、拔き足で入つて來ると、ヴアーヤはもう自分は誰とも關係がない、こんな幸福は無いといふ、アレキサンダーは熱烈なキッスをしたが、忽ち蒼青になつて、周章てゝ戸口から駈け出して了ふ、妻のマリーが裏庭からこの樣子を見てゐたのである。

○マリーは、嫉妬に堪へ切れず、ヴアーヤに向ひ、もう歸ると云出す、ヴアーヤは無邪氣に、自分はウエルシンスキーとの婚約を破つて了つたと告げ、一緒に庭に出て、面白く遊びませうといふ、マリーは不愉快げな顏色で、辭つ

て了ひ、出て行つた。

○アレキサンダーは、息を喘ませて歸つて來る、ヴアーヤは、マリーが行つて了つたと云ひ、アレキサンダーに歸つてはいけぬと云ひ、一緒に庭へ出て茶を飲みませうと促み『私は今日は眞實に幸福です、今日まで樂みといふものゝ意味を知らないでゐました』といひ、二人手を取つて一緒に庭へ出て行く。

▲第三齣　同じ日の夕暮、ヅウバレフの後庭、枯草の堆が處々に嵩高くなつてゐる、後は林で、黄昏の色が一面に這ひかゝり、朦朧たる風光である。

○ヴアーヤの年老つた乳母の、マヴラが、ヴアーヤを尋ね廻り、漸と枯草の上に坐つてゐるのを見附け出し、ヴアーヤのあまり野育ちらしい擧動を呵る。

○處へ父のヅウバレフが、ヴエルシンスキーから來た手紙を手にして入來り、之も又娘を叱り付けてゐる、ヴアーヤは枯草を取つて、拗つたり、嚙んだりし

て、一向無頓着である。

○隣人のボエフが其處へ來て、ヅウバレフを宥め、娘をマルコフの嫁にやるが善いと勸める、律義者の父は大立腹で首を振り、腕を叉み、果ては耳を借さなくなる。

○アレキサンダーが入來ると、ヅウバレフはヴアーヤがヴエルシンスキーに結婚するやう、說得してくれと賴む。

○ヴアーヤが、マルコフと相愛してゐると世間の噂のあつた事がある、ヴアーヤも嘗てマルコフの熱情を嬉しと思つた事も實際あつた。

○アレキサンダーは、ヴアーヤと唯二人になると、マルコフは、汝と均合つてゐない、彼は物質主義者で、趣味のない人間だから、ヴアーヤの美しい性質を認める事は出來ぬといふ、ヴアーヤは、マルコフは眞實に、心から信切な人だと云張る。

○アレキサンダーは、ヴアーヤが、世上の經驗がないからだと云ひ、ヴアーヤは、アレキサンダーの忠告を守ると誓ふ、アレキサンダーが立去ると、後へ今の話の、マルコフが枯草の堆の、奥の方から出て來る、若い、元氣な青年である。

○ヴアーヤは、マルコフが熱心に、結婚の申込を父の處へすると云ふのを辭り、物質主義者は到底自分を理解してくれないといふ、物質主義者といふ事が實は、ヴアーヤにも何だか分らぬ、マルコフにも何だか分らぬ、二人は喧嘩して別れる。

○アレキサンダーが歸つて來ると、ヴアーヤは飛びかゝつて『私は誰も、何事も忘れて了つて、唯、貴方一人丈け、思ひます』と云ひ、野性的な仕方で抱き付いて、小兒らしい感情の一時に爆發したる如く、一緒に何處かへ連れて行つてくれとせがむ。

○アレキサンダーは、自分はもう老人だから、到底汝に滿足を與へる事は出來ぬと云ひ、誰か呼んでゐるやうだ、氣を落付けるがよいと宥めて、そこ〳〵に駈け出して行く、ヴアーヤは、枯草の上に泣倒れて『歸つて頂戴、歸つて頂戴、明朝てはもう遲過ぎます』と叫ぶ。

▲第四齣　アシユメチエフの客室、ヅウバレフ入り來つて、アレキサンダーとさし向ひに、椅子に腰を掛け、娘のヴアーヤの影が見えなくなつたと、心配さうに話し、アレキサンダーの家にも來てゐないと知れて、愈々、氣遣ひ始める、皆がいろ〳〵に宥める。

○ヴアーヤの事件あつて後、アレキサンダーは妻と仲和りせうとする、併し、マリーは自分の故家へ歸り、夫と關係を絶たうと決心してゐる。

○アレキサンダーも、ヴアーヤの事を心配してゐるので、マリーは、ヴアーヤが實は、此家にゐるのだと小聲で告げる、アレキサンダーに行かれたから、

ヴアーヤは庭を駈けぬける中、マルコフに出逢ひ、その馬車の中に入つて、一夜をマルコフの邸内で明かし、朝になつてアシユメチエフの家に來たのである。

○マーリーは、實はヴアーヤが昨夜一夜、自分の家に泊つたのだと、ヅウバレフを安心させる、ヴアーヤは奥から出て來る。

○處へマルコフが、アシユメチエフ家から購入れた林の代金を持つて尋ねて來る。

○マーリーは、ヴアーヤがマルコフを愛してゐる事を聞いてゐるので、マルコフと結婚させるやうに父を説く、アレキサンダーもヅウバレフに向ひ、結婚に干渉するなと忠告する。

○ヴアーヤは、マルコフと握手し、アレキサンダー夫婦は仲和するので、カーテンが落ちる。

○要するに、一場の喜劇であるが、露國々民生活の可成強く描かれてゐる背景の中に、アレキサンダーといふ、呑氣な、而も世間摺れた老少年と、ヴアーヤの如き自然の一片を削り來つたやうな野性兒を點出して、巧に一編を彩つてある處に、一種の暗示を讀む心地がして、明るい笑の裏に、暗い涙が浸んでゐる、自然兒としてのコミサーチエフスキー夫人はノラに扮した時の、自然的と覘つて、却つて技巧的に見えたのとは違ひ、天眞爛熟、自然兒と全く合一し、頗るヴキヴキドな印象を與へ得た、露國人にはかゝる一面の特性が、その血の中に流動してゐるのであらう。

（その二）　『太陽の兒』の梗概

▲第一齣、將軍の子の、一化學者プロタソフの家、門番がプロタソフの仕事を諷刺するやうな歌を謳ふ、プロタソフは、白い被衣を着て、卓上のア

ルコール、ランプの青い焔を立てゝゐる上へ、試驗管を置さなどして、熱心に化學的の實驗をやつてゐる。

○看護婦が入り來つて、虎列刺病の大流行の話などし、それから、鍛冶屋のエゴアーが、妻を打擲して困るから、說諭してくれいといふ、プロタソフは承諾する。

○處へ、リザが入來る、是はコミザーチエフスキ夫人の扮する處である、革命黨の學生が、騷亂の時に殺されて、血を流したのを見て、神經に激動を起し、それから病人になつてゐるので、眼光もドンヨリと沈み、髮は亂れ勝になつて、顏色は蒼青で、白い衣服を着けてゐるので、一層陰氣で、一見神經過敏症に冒されてゐる、厭世的の、女豫言者と云つた印象を强く銘せしむる、露國の暗黑なる社會の一側面の標象とも見られ、又露國特有の性格を代表したるのとも見られる、このリザは、自分を戀してゐる篤志軍醫のチエプルノイと連れ立つてゐ

る。

○處へ鍛冶屋のエゴアーが來る、粗末な破れ服を着て、半白の髮を蓬々と亂し、握つた手は堅い拳になつてゐる、例のゴルキー的の人物である、プロタソフが、妻を今少し優しくせよと說諭すると、イヤ、今後も相變らず、打擲してやると云つて、怫々して出て行く。

○チエプルノイは、あんな野獸的な奴は、充分打のめしてやらねばいかぬといふ、リザはそんな事を一言聞いても、怒り立つたモブや、殺された學生の血の事を思ひ出すと云つて、肩先を慄はせる、チエプルノイは神經を起したかと氣遣つて、後園へ連れて行く、

○處へ、かねて、プロタソフを戀してゐる富豪の寡婦メラニアが、大にめかし込んで入來る、プロタソフは、自分の奥へた書物を讀んだかと問ふと、自分はその書物の文章を理解する事が出來ぬといふ、プロタソフは書物を手に取つ

で説明するが、一向、頭には入らぬ樣子である。

○メラニアは話を變へて、嬌態を見せ、自分は貴方の爲なら何んな事でもしますと云ふ、プロタソフは化學者の無頓着な風の中にも、喜びの色を示し、自分の試驗する材料を送つてくれるやうに賴む。

○チエプルノイは、リザの爲に、藥を求めに入つて來て、メラニアを見ると、化學の御研究は進歩しましたかと問ひ、プロタソフに對する戀を嘲ける。

○プロタソフが何處かへ行くと、メラニアは下婢に錢を與へて、プロタソフの細君ヘレンと、美術家のヴアジンとの關係が何うなつてゐるかと聞く。

○處へ鍛冶屋のエゴアーが大に醉つ拂つて入來り、プロタソフを尋ねて、最前はつい罵詈したやうな事を口に出し、甚だ濟まなかつたと詫びる、プロタソフは宥めて、汝の家へも行くから氣にするなと云ふ。

○リザとチエプルノイが歸り來る、チエプルノイは自分の生涯の寂寞を訴へ

る、リザは結婚したら善からうと忠告する、チエプルノイは、自分は良い娘を見つけてはゐるがと、暗にリザに仄めかす、リザは、自分は貴方と結婚はせぬと、已に決心を話したてはないか？といふ、凡て沈鬱な、墓の底から出るやうな聲である。

○入代つてプロタソフの妻のヘレンと、美術家のヴアジンが入來る、美術家はプロタソフの無感覺な化學試驗をもどかしくて腹が立つと云ひ、自分の妻に對し、無頓着な態度をしてゐるのを憤慨する、ヘレンは、何うせ自分は、その內、夫に不必要品だと云はれるだろうから其時は自分は此家を去るといふ、

○リザが來て、夫の事を構つてやらぬと云つて、ヘレンを責める、下婢のフイヤが、メラニアが自分に金をくれて、妻君と美術家との間を監視してくれと云つたと告げる、ヘレンは怒つて下婢を追出す、美術家のヴアジンが出て來て、ヘレンに愛を打明け、共に逃亡せよと勸める、ヘレンは考に沈む。

▲第二齣　プロタソフの家の玄關、庭を廻らした塀の一方に門が附いてある。

○家主の息子の、シサが門口より入來つて折ふし庭にゐたチエプルロノイに、プロタソフを勸めて、自分の父の製造場の、技師に來てくれるやうにしてくれと賴む、チエプルノイは叱り付けて追ひ返して了ふ。

○チエプルノイは、出て來るリザに向ひ、再應結婚の申込をして、彼女がなくては自分は生きて居られぬといふ、リザは再應拒絕する、チエプルノイは首を垂れて、一隅の椅子に倒れかゝつてゐる。

○ヘレン、プロタソフ、ヴアジン等入り來つて、廊下の上の、卓を圍んで各〻腰を卸ろす、ヘレンは、美は人生々活の眞髓であるといふ、ヴアジンが書にするやうな一の思想を話す、ヴアジンは贊成して、材料に使ふといふ。

○元の停車場長て、今は失職して、醉紛漢の仲間入してるトロシンといふ男

が門口から入り、廻らぬ舌てエゴアーの住所を聞いて蹌踉として出て行く。

○後を見返つて、リザは、例の沈鬱な調子て、あのやうな醉紛漢の仲間は、ヘレンがヴアジンに暗示を與へた書題の中の、如何なる位置を占めてるのだらうかと、諷刺的に尋ねる。

○ヘレンと、來合せてゐるメラリヤ、その他の間に、いろ〳〵花やかな、賑やかな對話があつて後、リザは又プロタソフに向ひ『貴方等は全切り盲目てす、森の中の獸類のやうなものてす、全く暗闇の中に住んてるのです、世界には憎むべきものゝ外、何にもありません、美しい言葉や、理想に醉はされて了つて、憎むべき事だらけなのに氣が附いてゐません、併し、何日かそれが貴方等の頭に嚙り付いて來ます』といふ。

○プロタソフは、リザに向ひ、美術家や、科學者の仕事は、人道のセメントてある、勞働者等の幸福安寧をも高めるものだと論ずる。

○リザは、何うぞ、それを信じたいと云ふ、プロタソフは『死の恐怖』が唯、人生の幸福を害する、乍併『我々、太陽の兒、即生命の源たるものは、その恐怖にも打勝ち得る』といふ。

○恰も此の時、エゴアーの妻が、門口から悲鳴を擧げて闖入する、後から夫が手に木片を提げ、打ちのめさんと息喘き切つて追駈けて來る、皆が妻を隱してやる、エゴアーは連りに怒鳴り立て、漸く皆に引かれて入る。

○リザは、起上つてプロタソフに向ひ『貴方は嘘吐きです、人民は野獸です、貴方は自分が夢許り見て、人民をあまり後の方へ取り殘して了つたのです、貴方は小い人、低い人、敵て圍まれてゐます、我々は慘酷なる事と、憎むべき事に打勝たねばなりませぬ』と云つてヒステリー的に氣絶する。

▲第三齣　矢張前の場面、家の中は混雜し返つてゐる、エゴアーの妻が虎列刺病にかゝつたのである、プロタソフの妻は看護をしてやり、プロタソフは

治療の方に取かゝつてゐる、されど、これ等は皆奥の方の出來事としてある。

○チエブルノイは、ヘレンの口ト、リザとの會話から、リザが愈々自分と結婚する氣のない事を確める、失望して中庭をぶら〳〵してると、美術家ヴアジンと出會する、美術家は、チエブルノイの顏に、奇妙な表情のあるのを見て、注意を與へる、チブエルノイは行つて了ふ、彼は再び歸つて來ない、自殺の決行に赴いたのである。

○後て、リザは、何か不幸の起つた事を直感する、ヘレンは、うるさく附纏ふヴアジンを遠ざけるやうになつて、夫に親み出し、メラリヤは失望する。

○チエブロノイの死んだ報知が來る、されど皆は心配して、リザには知らせない、リザは皆に問ふが、何とも返事がない、それて愈々不安の樣子て、眼が怪しく光り出し、キヨト〳〵と邊りを搜がし求むる樣子て、『誰か、もう生きてゐないものが、自分の傍に近づいて來るやうな氣がする』といふ。

△第四齣　前幕と同じ場。

○チエブルノイが死んだといふ事が知れて、リザは次第に發狂的態度に陷る、コレラの傳染が日々激しくなつて、市中は大騒ぎをしてゐる、無智のモブは、醫者に責任があると云つて、批難攻撃する。

○かくて、賤民の怒りは爆裂し、化學者のプロタソフの化學試驗が、この傳染病の原因であると妄信し、鍛冶屋を始め、一揆がプロタソフの邸宅に亂入し、プロタソフを捻ち倒して了ふ、ヘレンはピストルを放つて一揆を倒し、漸く夫を救ふ。

○衆愚を向上せしめんが爲めに、自己の生命を犧牲に供するを惜まなかつた人等が漸く自己の生命丈助かる事になる、人民の攻撃に脅かされて、リザの眼は愈々凄く光り、顔色は全く死人の如くなつて、全然發狂に了る。

○この劇は何となく散漫で、ゴールキーの小說の、單なる戲曲化のやうに思

はれるが、リザの神經過敏と、沈鬱な調子が、灰色から次第と眞暗な色にうつり變り行くさまを活現し得て、最深い印象を與へ得た、コミザーチエフスキー夫人は、慥に、この二の露國劇に依て第一流の大女優たる事を首肯せしめたのである。

（四十一年五月）

北米の大彫塑家セント、ゴード

（……彼の諸作……彼の終焉……）

（一）

大紐育市の心臓たるセントラル公園へ通じてゐる一大動脈とも云ふべき一條の大路は第五街である、米國の富の王公が、ゴシック式や、ルネッサンス式の、華美と傲奢とを光らせた宏大なビルデキングが、額と額と突き合せた中に、新派舊派の寺院の塔が、スピアーの尖立つた頭を昂然と峙てゝ、俗人のビルデキングに氣押されまい〳〵と、高く青空に向つて背伸をしてゐる一帶の光景、近世的の物質文明の、眩ゆい金色の光が、中古的の宗教趣味の燻しをうつすりとかけられてゐると云ふやうな趣を感ぜしむる、地方からの見物客を滿載した見物車は、發聲器を口に當てゝ、説明の聲を枯らしつゝ必ずこの第五街を貫い

てセントラル公園へと馳せ向ふのである、と、その公園の入口に、今、通過して來た許りの市街の趣を、一種、標象化したやうな、うつすり燻のかゝつた金色の騎馬像に先づ視線を吸收せられねば措かぬのである、一度紐育市に遊ぶものゝ必ず訪ふのはセントラル公園である、そして、そのセントラル公園に入るものは、必ず或る印象を受けて、後日この公園を瞑想する毎に、常に眼前に髣髴たる一の幻像を感ずるものは、彼の金色の騎馬像であるに相違ない。

騎馬像は、セントラル公園の一角の綠林蒼樹を背景として、右には新たに開けた、二十階の、天を摩する、綠青色の屋蓋を着けた、白亞色に塗られたるプラザーホテルを見上げ、磨き立てた花崗石臺の上に立つてゐる、馬上の人はグランド將軍の右の腕であつた、南北戰爭の勇士、シャーマン將軍である、シャーマン將軍は露頭のまゝ、左手で馬を制馭し、右手に帽子を保つてゐる、上衣は襞を打つて後に流れ、馬は悍然として、尾毛は風に亂れ立ち、後脚に、松の枝

を踏みにじつてゐる、翼のある勝利神が馬前の左側に立ち、右手を擴げ、左手には棕櫚の葉を握つて總體ブロンズの上を、モデレートな金色で色つけてある、理想と現實とがこの一群の上に美しく調和されてゐるので、馬上の人はヒロイックの化身であるが、併し人間である、女神は大膽なる勝利と理想的美の標象である、平和は常に先頭し、常に終局する事を示してゐる、女神の胸には、米國合衆國の鷲の記章が縫ひつけて、米國の勝利神たるを意味し、凡てが米國國民性を結合せしめて、この一團體は、將さに前進せんとする活動の妙趣を現してゐる、この彫像の作者は即ち米國第一流の彫塑家オーガスト、セント、ゴードである。

この騎馬像が開幕されたのは、千九百〇三年であるが、ゴードが抑も、此仕事に取りかゝつてから實に十一ヶ年の歳月を閲したのである、尤もその間、八ヶ年許は、病氣の爲め、仕事が進行しない、實際勞作に從事したのは三ヶ年だ

と自分で言つてゐた、併し其間彼の苦心は一方ならぬもので、幾回となく下圖を取りては破り棄て、訂正に訂正を重ねた末、千八百九十七年、佛國巴里に赴て、模型に取りかゝつた、九十九年、サロンで、馬と騎者とだけを公衆の縱覽に供し、翌年巴里の大博覽會に、始めて、全部の模型を出品して、其手際を認められたが、それでまた滿足が出來ぬ、米國へ歸つて、ヴァルチモーアのウインドソアー附近にスタデヰーを建て、その中に引籠つて模型に改竄の刀を加へ、勝利神の頭、翼、棕櫚、騎者の上衣などを一々作り直し、始めて巴里へ送つてブロンズで鑄上げさせ、それをバファローの大米國博覽會へ出品し、非常なる賞讃を以て迎へられた、遂に規定以外の特別の褒賞をわざ〳〵作つて、作者を顯表する事となつたのである、かゝる苦心の結晶體として、彼のシャーマン像に對する時は、我等は茲に一個、米國の國民的英雄の、最も適切なる標象化を仰ぎ見る以外に、この大彫塑家の、偉大なる藝術的良心の、一襞一折の

微にも漲り通つてゐる事を感じ、一種の興會を禁じ得ないのである。

（二）

ゴードの他の作は、第五街と、ブロード街との交叉點、マヂソン角ガーデンの青空を突く高塔の上に立つてゐるデキアナの像、そのデキアナの見下ろせる綠樹の蔭に立てるフアーラガット將軍の像、それから彼の、ターマニー、ホールの、前飾のセーント、ターマニーの像、クーパーユニオン角に立てる、ピーター、クーパーの像などが、最も廣く知れ渡つてゐる、ボストンの、公共圖書館の前の、把火者や、ロバート、ゴート、ショウの像や、スプリングフキールドの、ビユーリタンを標象化した立像や、シカゴの、リンコルン及びローガンの像、英國エヂンバラの、セント、ギルス、カセドラルに於けるロバート、ルイス、ステブンソンの紀念像などは、何れも彼の名作である。

併し、ゴードの幾多の作中、群を拔いて、獨歩の地位を占め、彼の天才の達

すべき最高水準を示してゐるものは、ワシントンに於ける、ロック、グリーキ墓地の無名の墓を擁護してゐる『悲』又は『死』と稱せられてゐる一像である。此の像は襞の入つた布を頭から被つて全身を纏ふてゐる、顔は俯向いて、左の手の指先で頰を支へて、低い臺石の上に立ち、平い石を背景として、扁柏樹の、並木の中に、自然的地位を占めてゐる。

余はこの像の原型がセント、ゴートの紀念展覽會に、紐育の美術博物館に飾り立てられた時、親しく一見する機會を得た、この印象は容易に消え失せないいかにも諸批評家の說の如く、その被布の間から覗いてゐる女の顏が何となく神秘的で、一個の深い、複雜なる人生の謎を表情してゐる、悲嘆の色はあるが、自制の意もその底に秘んで見える、壓迫する生の重荷をも不可言の平靜を以て堪へ切つてゐる如く、別に希望の影は閃めいてはゐぬが、地上に生み落された人間の靈魂が、絕望的反抗を企てやうとするやうな調子はない、寧ろ、人生を

超絶したと云つた風で、半ば閉ぢた眼は、我等の有限なる眼界以上の境を見透し得てゐるやうで、無限の智と、深大なる休息とが、暗示的に標象化されてある、勿論見る人々の心々で、その複雜は意味が多樣に讀まれて來るので、『悲』と縱まに稱名せらるゝのは、却て人をして誤解せしむるものである、

この像は、一部の批評家をして、ゴードが一躍、ミケロ、アンゼロに伍し得る擔保たるものとして頌揚せしめた、ゴード自らも彼のベストを盡した得意の作と、自白してゐる。

今一つ、彼れの最も紀念すべき作品は、シカゴ市の、ジャクソン公園に於けるリンコルン像である、威嚴と單純とが最も巧みに結合されて、此の國民的英雄の活々した肖像が觀者の眼に、常に新なる印象を與へてゐる、この作は早年期に屬してゐるが、紀念像の模型としては、疑もなく彼の唯一のマスター、ピースである、像の開幕と共に、彼の名は國民的のものとなつた。

オーガスト、セント、ゴードは實に千八百四十八年三月一日、愛蘭のタブリン市に生れた、父方には佛蘭西人の血を受けた混血兒である、六歳の時、米國に連れて來られて寶石切の家に住み込んだ、後、クーパー、インステキテユートで畫を學び始めたのが彼の功名心の出發點である、六十七年、十九才の時、巴理に赴き、美術學校で修業中、七十年の普佛戰爭が起つたので、羅馬に去つた、後二年にして米國に歸つて、彼の一生の天職の道程を踏み始めた、彼は巴理で熟練なる技術を學び、伊太利でルネッサンスの新精神に觸れた、ルネッサンスはクラシック派の、抽象主義に對抗し、個性的發揮を主張するものである、ゴードは十九世紀初頭の新クラシック派の、生命なく、個性なく、平凡なる作風の、米國美術界に跋扈してゐるのを一掃せんと企て、自在なる、單純なる、自然なる新派の手法を應用して玆に彫塑界に一新紀元を劃する事となつた、彼の紀念像が、理想的の形體と裝飾的とを巧みに結合してゐるのは、即ち彼の新意を

超絶したと云つた風で、半ば閉ぢた眼は、我等の有限なる眼界以上の境を見透し得てゐるやうで、無限の智と、深大なる休息とが、暗示的に標象化されてある、勿論見る人々の心々で、その複雜は意味が多樣に讀まれて來るので、『悲』と縱まに稱名せらるゝのは、却て人をして誤解せしむるものである、

この像は、一部の批評家をして、ゴードが一躍、ミケロ、アンゼロに伍し得る擔保たるものとして頌揚せしめた、ゴード自らも彼のベストを盡した得意の作と、自白してゐる。

今一つ、彼れの最も紀念すべき作品は、シカゴ市の、ジャクソン公園に於けるリンコルン像である、威嚴と單純とが最も巧みに結合されて、此の國民的英雄の活々した肖像が觀者の眼に、常に新なる印象を與へてゐる、この作は早年期に屬してゐるが、紀念像の模型としては、疑もなく彼の唯一のマスター、ピースである、像の開幕と共に、彼の名は國民的のものとなつた。

オーガスト、セント、ゴードは實に千八百四十八年三月一日、愛蘭のタブリン市に生れた、父方には佛蘭西人の血を受けた混血兒である、六歳の時、米國に連れて來られて寶石切の家に住み込んだ、後、クーパー、インステキテユートで畫を學び始めたのが彼の功名心の出發點である、六十七年、十九才の時、巴理に赴き、美術學校で修業中、七十年の普佛戰爭が起つたので、羅馬に去つた、後二年にして米國に歸つて、彼の一生の天職の道程を踏み始めた、彼は巴理で熟練なる技術を學び、伊太利でルネッサンスの新精神に觸れた、ルネッサンスはクラシック派の、抽象主義に對抗し、個性的發揮を主張するものである、ゴードは十九世紀初頭の新クラシック派の、生命なく、個性なく、平凡なる作風の、米國美術界に跋扈してゐるのを一掃せんと企て、自在なる、單純なる、自然なる新派の手法を應用して茲に彫塑界に一新紀元を劃する事となつた、彼の紀念像が、理想的の形體と裝飾的とを巧みに結合してゐるのは、即ち彼の新意を

語るものである、米國今日の彫塑界は、彼の感化に負ふ處多大なるものである、猶、彼は早い仕事師ではなかつた、藝術的感興の高潮に乘ずるとを一生の心掛とし、常に良心の光明の中で働いてゐた事も彼の一特長である。

大統領ルーズヴエルトは、頃日、ゴードに托して、驚章の米國新金貨の意匠を創案せしめた、疑ひもなく彼の名聲は米國の通貨となつて、世界の市場に通用する資格を有するものである、意匠漸く成つて、彼は今年八月三日、ニユーハンプシヤアーの、コンコードで六十歳を以て長への眠に就た。

米國は第一流の彫塑家を失ひ、世界は有數の一大美術家を天堂に奪ひ去られた、今や挽歌は、追悼の鐘聲の如く、各所の紙堂貧壁の中から相響き、相吊つてゐる。

（四十年十一月十五日）

米國の閨秀作家 エジス、ワートン女史

彼の有名なる滑稽作家マーク、トエンとヘンリー、ゼーム、及びウヰリアム、デキトン、ホウエルが現時米國文藝界の三位一體である、この中、マーク、トエンは一種無類の作風で、他の追隨を許さぬものがある、柳や楡の並木の中に、枝や幹の曲りくねつた一本の老松が高く風に傲つてるといふ趣がある、ヘンリー、ゼームスは永く英國に逗留して、晩年に歸つて來たので、その作の凡てが外國種なると共に、米國人には米國の土に根を卸したものゝやうな氣がしてゐない、矢張輸入品扱ひの氣味が失せぬ、獨りホウエルは文界の全野を壓して、鬱然たる根幹を四方に張つてゐる觀がある、所謂『雜誌派』と呼ばるゝ米國文界の一大勢力は、此のホウエルの統御の下にある、從つて一部の反抗を招いて、

非難の聲を耳にする事も屢々ある。

近頃、米國の一閨秀作家アザートン夫人が米國小説界の創意の缺乏を説き、これをホウエルの勢力下に同一歩調を取つてゐる雜誌派の無氣力、無能の罪に歸し、この派は狹い、平凡な、瑣細な事許り描寫し、瑕瑾の無い、御目出度いやうな、摸型に陷つた物許り書く、人生の悲壯、雄大なる劇的光景の活畫は探がしても見當らぬ、これが眞に亞米利加生活の鏡であるとは云へぬと難じ、畢竟、ホウエルの權威の下に、自己の個性を壓迫せられ、何等かの創意を出さんとする勇氣も、努力も萎縮し去つたのであると氣焰を上げてゐる、此批評の何れ程迄眞理であるかは暫く措き、所謂雜誌派なるものゝ勢力の一面を證する左劵たる事は爭はれぬ。

雜誌派中には、プリンストンの詩人、ヘンリー、ヴアンダイキもゐる、今茲に說かんとするエヂス、ワートン女史もその一人である。

エヂス、ワートン女史の、有名になつたのは三年前、"House of mirth" を著して以來である、昨年末、"Fruit of The Tree," 出でゝ女史の評判は愈々高まり、米國第一流の閨秀作家として、今や新聞雜誌にその盛名を謳歌されてゐる、一葉女史が鬚眉の作家を壓して顏色なからしめたやうな奇現象が今日、米國の文壇でも見受けられるのである。

ワートン女史はマサチユセッツ州の片田舍レノックスの宏大なる邸宅に住んでゐる一富人の細君である、楕圓形の、一種悲愁を帶びた顏色で、眼色、口附は諷刺的の劃線が描かれ、肖像畫で見ても智的の婦人である事は直に印象される。

近代の婦人解放の二方法——即ち一は、直に家庭の現繫縛を斷つて、心身の自由境に跳り込む、一は即ち詩歌、音樂、繪畫等に、理想の王國を求めて、その中に逃れて行く——この後者に屬する解放的婦人の一タイプと見るべきもの

てあろう。

ワートン女史は千八百六十二年、紐育で產れ、二十四歲の時、エドワード、ワートンに結婚した、爾來歐洲で暮した方の時日が多かつたと云はれる、九篇の小說、三篇の記述及び批評、一篇の戲曲の飜譯、凡て今日までに十三篇の著述がある、千八百九十九年の處女作 "The Greater Inclination" の短篇集は、後年の "House of mirth" の大作を豫告するものである、千九百年の "The Touch stone" には、有名なる女作家と戀愛事件のあつた紐育の一倶樂部員が、その女作家の死後、或る貧しき娘を愛し、結婚する段取となつて、その費用に充てん爲め、女作家の嘗て自己に送れるラヴレターを公刊し、それが世間を騷かせて、澤山の金も贏ち得る事となつたが、秘密公開の耻辱と悔恨とが彼の男性を囚にするといふ米國現代文明に對する諷刺脈の强い小說である。

千九百〇一年の "Crucial Instances" は短篇集である、その中の "The Angel at the grave" は文學的に名のある祖先――今は巡禮者の拜堂のやうになつてる家に、番をしてる婦人が、その祖先の名を活々と保たせるやうに、一生懸命になつて常に力めてゐるといふ物語、一種の暗示を含んでゐる、その翌年に "The Valley of Decision" が出た、主人公の若々しい、ラヂカリズムが、周圍の痴鈍な、反語的な、不活潑な、傳習的の勢力に、漸次に破られて行く處を寫して一部の好評を博した。

續いで千九百〇三年に出た "Sanctualy" は、女史の性格描寫の非凡なる腕前を現はしたものとして認められてゐる、更にその翌年、"The Descent of man" と題する短篇集がある。題目の小說が卷頭を壓してゐる、この主人公は、評判の高い書籍を書いた、眞面目な、老科學者が、研究に忠實なる爲め、神の惠を離れるといふストリーである、同篇中の短篇、"Mission of Jane" は、子の無い家庭の養女になつた少女が、終に養父の頭領と結婚する事となつて、子の無

い夫婦は再び昔の情人時代に歸るといふ諷刺的のものである、"The Ladyas maicles Bell"は幽靈譚、"Venetian niglts Entertainment"は祭禮の假面舞踏の華麗な日記帳、その才の多方面にして、觀察の多角形なるを證してゐる、一批評家は、女史の短篇は佛蘭西の短篇のベストなるものに比して敢て敗を取らないと云つてゐる、アーヴキングの如き、ポーの如き、ホーソンの如き、米國は由來短篇作家に富んでゐる、女史も亦此脈を引いてゐるのであらう。

千九百〇五年に例の"House of mirth"が出て、忽ち讀者社會に嵐を吹き起らしめた、此の小說は短時日の間に數十版を重ね、女史をして四五萬弗の富を贏ち得せしめたといふ事である。

"Hous of mirth"は女主人公リヽー、バートが、米國の浮華なる社會的生活の暗潮に漂はされて、遂に難破船の悲運に陷る顚末を描いたもの、一部現代のアメリカン生活の活寫眞である、即ちこのリヽー、バートは、田舍の富有なる叔

母の家に寓してゐたが、相知つてゐる一青年畫家と、次第に深い戀に陷りながら、將來の生活の問題、殊に米國婦人の一生命ともいふべき、社交場裡に立つて一花咲かせたいといふ烈しい希望は、資產のない一畫家と結婚したのでは到底達せられぬのは明白である、從つて他の一方の富有なる求婚者を强ちに斥け得ない、リヽー、バードは、敎育のある、智の長けた、頭腦の勝つた、文明の善化惡化を著しく反應してる若い婦人である、彼女は世の一般の浮ついた、虛榮一方に走る婦人の如く、輕々しく戀を捨てゝ金に結婚する程の、冷やかな心になり得ない、さればと云つて、盲目的に、情一方で、戀愛の滿足に一生を托するといふウブな處女氣にもなれぬ、その間に立つて煩悶してる中、富有なる求婚者との間の交情が次第に深くなつて、已に婚約をしたといふやうな噂も立つ、畫家は失望して去つて了ふ、リヽー、バートは、愈々情と智との相剋するに苦んでゐる、彼是すると叔母が死んだが、今まで噂のあつた、巨萬の遺產は、

リヽー、バートの手に落ちず、僅かに、彼女の負債を返濟し得る丈の額しか讓つてくれなかつた、富有なる求婚者との關係は、これで切れる、リヽー、バートは、疲れ、衰へたる顏色をして、紐育の第五街、交際社會の美々しく着飾れる貴婦人を載せた自働車や、馬車の蠢き立てゝゐる中を悄然として歩んで、彼の舊情人の寓をたゝく、畫家は驚いて相擁して、熱いキッスをする、これから二人で樂しいホームを造ろうと云つて、男の愛情の深い言葉を謝して別れたが、翌日、リヽー、バートは、マヂソン角の下宿屋の二階で死んでゐた、不眠症の持藥にしてゐた、モルヒネの量を過つたのであろうといふので結んである。

リヽリ、バートの性格は際立つてよく描かれ、現實の社會的背景の中に、劃然と浮上つてゐる、他の副人物は、インプレッショニスト派の筆法を用ひてある、今まで、スケッチ許取つてゐた畫家が、大カンバスの上に、初めて大畫圖を創成し得た概がある。

この作に次で、昨年の暮 "The Fruit of The Tree" が出版された、之れが亦一時批評界の中心的題目となつた、"The Fruit of The Tree" は、ウエストモアーの木綿製造場の器械で手を失つた一職工を、病院に見舞ひに來た副支配人アムハーストと、その知合の、志願看護婦ジエーン、ブレント孃との會話で始まる、この副支配人アムハーストは製造會社の改革、即ち社會問題に熱中してる一の理想家である、ブレントは亦志を同うして、アムハーストに理想を皷吹してゐる智的婦人である。

水車製造場の持主のベシイ夫人は、先年夫を失つた年若い寡婦であるが、ロング島から製造場を訪ねて來て、この副支配人と會見し、それから何となく一種の情に因らへられる、アムハーストもインテレストを置いて、共に馬車を郊外に驅り、談話の中に自分の理想を告げると、夫人も同意するので、氣が合つて交情は濃かになり、かくて二人は結婚する事となる、併し結婚後、新主人公

たるアムハーストの改革意見は、先夫の遺子を庇ふ親類側の異議や、ベシイ夫人の不熱心で思ふやうに行はれない、アムハーストは面白くない日を送り、家庭の中は陰氣に閉ぢられる、折ふし南米から、アムハーストの友人が、嘗て同人に皷吹せられた理想の木綿製造の工場を建てた、支配人を一人周旋してくれと云つて來る、アムハーストは、その方へ行く氣になり、今、自分の家に寓して、先夫の遺子の家庭教師になつてゐるブレスト嬢にそれを相談する、ブレスト嬢はいろ〳〵諫めて、夫婦間を融和せうと力めるが、互に感情の齟齬してる上に跛が悪くて、兩方からその機會を失し、アムハーストは南米へ去る、後で、ベシイ夫人は、夫の送つた手紙に、あまり例の馬へなど乘るなとあるを、何う思つたか、馬を引き出して乘り歩き、落馬して、大負傷をやり、人事不省で舁がれて返つて來る、ブレント嬢は大に驚き、看護に手を盡す傍ら、アムハーストに歸つてくるやうに手紙を書く、アムハーストの歸着する先に、ベシイ夫人

は死んで了つた、母を失つた遺子はブレント嬢に深く馴染んでゐるので、それを機に、アムハーストは嬢と結婚する、理想の家庭は成立し、理想の改革も次第に行はれて來たが、夫人ブレストは、娘時代に求婚者であつた一醫師から脅迫されて、金を强請さるゝ、それは先夫人落馬して死に瀕した際、看護の勞を取つて居たブレスト嬢が、その醫師にモルヒネを調合させて病人に勸めてゐたといふ廉である、ブレスト嬢、即ち今のアムハースト夫人は夫にそれを自白し、病人があまり苦むので、到底助命らぬ人だから自分は用ゐさせてゐたのであるといふ、彼の一醫師は、故意に、生命を奪ふためにしたのだといふ、アムハーストは夫人に惡感を抱くやうになる、先夫人の親は、あの婦人が殺したのだと云ひ出す、ブレントは遂に姿を隱す、すると遺子がしきりに慕ふので、アムハーストは、再びブレントを病院に搜がして連れ歸る。

此の頃よりアムハーストの先夫人を懷しがる情は激しくなり、今回新築落成

の勞働者の爲めのホープ病院を先夫人に獻堂する祝祭日、今のアムバースト夫人は淋しい思を懷くといふので結んでゐる、イプセンの『ロスメル家』、ハーウプトマンの『寂しき人々』などの跡を追つた者である、唯、全體が何となく社會問題といふ背景に壓せられて、主人公が充分に働き得ない氣味のあるのが、頗る遺憾に思はれる、"House of mirth" では、社會的背景は主人公を鮮明に描き現すための、陰影として用ゐられてゐたのが "The Fruit of The Tree" では主人公が、その背景の、額縁の中に嵌め込められた趣がある、作品としては寧ろ退歩の徵候であらう。

一作併、その描寫の部分部分には、作者の手腕が充分に發揮されてゐる、叙景の精妙、心理的解剖の鋭敏、寫實的筆力の緊張、日本文壇の天外君などを聯想せしむるものがある、殊に、全體に、智的の調子の響き亘つてゐるのは、米國婦人の一特色を代表せるものといふべく、日本の女流作家などに一寸と見ら

れぬ點で、彼の代表作家たる一葉女史の情緒的なのに比して、好箇のコントラストをなしてゐる、社會問題といふ點に切り込んだのは、慥に女史の作に累をなしてはゐるが、これは取扱ひ方の上の、不用意に歸すべきである、兎に角、閨秀作家が、大膽にかゝる問題に面して立つた、その勇氣、その積極的態度は、大に推賞に價するものがある、而して此やがて、米國婦人の教育のレヴエルを證明する事ともなるのである、他に女史の伊太利の觀察錄たる "Italian Backgrounds" "The Decoration of Houses" 等の雜著も見るべき者である、ズーデルマンの戯曲 "Joy of living" の飜譯は女史の造詣する處を代言する者である。

（四十一年三月）

最近のジョージ、バーナード、ショウ

バーナード、ショウが昨年の週刊コーリアン雑誌々上へ寄稿した『新ゲーム』と題する短篇小説を一年の四分の一期中の最も傑れたる作物として、同雑誌の社長夫妻の記念懸賞金贈與規則に依り、社から一千弗の金券を贈つた、するとショウは、右の金券を突き返して、『自分は二重に原稿料を支拂つて貰はなくても善い、四分の一期中の最傑作といふのは、抑も誰が鑑定してくれたのか？金券は御返しするから、社長の記念碑でも建てる事があつたら、その費用の一部に使ふてくれたが善い』と例のショウ一流の文句を並べた手紙をやつた。

すると、一方も米國の雑誌記者、負けてはゐない、『貴下は、社長の記念碑と云はれるが痛み入る、他日、ストラッドフォードに、ショウー沙翁の記念碑が立つか、乃至オックスフォード大學にショウ氏の廣告術の記念講座が設けら

れる時の費用の一部に使つたら善かつたのてせう、あの作を鑑定したのは實は社中で、天下無敵のショウ氏を崇拜してる貴下の一弟子である、今回、解雇したから御安心下さい、右の一千弗は、同人の扶助料、兼廣告術の通信教授學校に通學する費用に充てる事にしました』

ショウは常に敵を作つてゐるが、その精力の絶倫にして、他を征服せずんば止まざらんとする健鬪の意氣の壯んなる事は、多く匹儕を見ない、紐育の書肆タッカーの囑に依り『藝術の健全性』と題し、彼のマックス、ノルドーの『衰頽』に對する辯駁論を公にし、『印象派』『ワグネリズム』『イブセニズム』等の優越の地位を明らかにしてゐる、ショウは『イブセンや、ワグネルが、この世間に不滿足を感じたのは、彼等にはこの世間があまりお人善しであるからてある、併しノルドーが不滿足を感ずるなら、ノルドーが、此世間に對して、あまりお人善してあるからてある、此區別が本人には氣が附いてゐないのだ』と痛

快に嘲倒してゐる。

ショウは更に新なる戯曲『ゲッチング、マーリード』と題する結婚の問題劇を作した、目下倫敦のヘイマーケット座に上場せられて、不少世間を騒がせてゐる樣子である。

この劇は娘の結婚式の日、監督エレンスレーの庖厨に於ける結婚論を以て始終してゐる、監督夫人の妹のレスビアは、獨身論者で、自分に求婚する將軍に對し『私は自分の家を持つのが好きです、自分一人のものでなくてはいけません、私は自分の獨立を誇つて、それに熱中して居るのです』、併し子が欲くはないか？と問はれて、『私は子供の爲めに善いお母なんにならなくてはなりません、國が子供を持つやうに自分に充分支拂してくれるなら私は持ちます、併し、その國は、家の中に男子が居なかつたから子供を持つてはならんといふのです、ですから私も國に云つてやります、私は子供を持ちませんと』、監督の弟のレ

インナルド夫人は夫よりも三十歳若く、夫一人では滿足せない、男と接吻するといふ廉で、離縁になつたのだが、この二人が又今日の結婚式に來た、レインナルド夫人は、年老つた夫を忌つた譯では無い、實は二人の夫を同時に持ちたいといふのである。

結婚すべき娘と、婿とが入つて來る、娘は法律上の結婚に不安の感を起して『自分は結婚はすまい、若し夫が大罪を犯した場合にも自分は夫の罪を分たなくてはならない』といふ、花婿は『若し妻が、他の人と自由戀愛に陷つたら、自分はその責任を負はなくてはならぬ』といふ。

庖厨には結婚制度に代ゆべき新システムがなくてはならぬといふ議論が沸騰する、處に八百屋のコリンスといふ男が來る、この男の兄弟の妻のジョージ夫人は屢々他の男子と突走り、最後には夫の處へ歸つて來る、歸つて來る度に性格が異つて、一人で幾人前の複雜の婦人を現はすので、ジョージは幸福な生活

をしてゐるのだと、兄弟を羨やみ自分の妻の、家に許りへばり附いてゐるのをこぼしてゐるが、このコリンスが、ジョージ夫人を一同に紹介し、夫人は『此の結婚の日曜日』を以て、夫婦の感情を常に新にしたる事を忠告し、其場で、彼のレインナルド夫人の情人と戀に落ちる、新夫婦は遂に結婚式を擧げる、監督は『結婚に代ゆる新システムを案出して、道德に對して大なる奉仕をなさねばならぬ』といふので了つてゐる。

尙、ショウの舊作『武器と人』はストラウス氏の手に依り、オペラタイズされて、次の季節、ロンドン及び紐育に於て上場さるゝ筈である。

兎に角バーナード、ショウは大陸文壇に對抗して英國文壇の地位を重からしめてゐる當代唯一の花形役者である。

（四十一年五月）

註、ショウ氏、其后の作には『新聞切抜』『アランコ、ポスネットの正體』『釣合ばぬ緣』『短歌』の黑夫人』等がある。

詩人ミラーの山莊を訪ふ記

七月四日は例の米國獨立宣言の大祭日（十月の感謝祭及び十二月の基督降誕祭と共に三大節である）二三日前から、至る處の街々で小兒の弄する爆々たる火戲の音、行人を驚かし、全市は下手な戰場になつたやうである、今日は朝からさぞ賑ましい思をする事だろうと、一日籠城の決心でゐる處へ、長髮頂に垂れ、プラスカ產の狸海獸の毛皮を脚胖に穿いたジャパニース、ロメオの管野君が老詩人ミラー翁の許からわざわざ迎ひの使者に來てくれた、實は二三日後に行く筈であつたのが、時も時、折も折、雲上の仙に迎へられた樣な心地がして支度を整へ、友人と共に管野君に尾して王府の寓居を出て、電車に乘じて爆音燬々たるブロード街の人波湧き立つ巷を過ぎり、メリット湖畔を回りて路は次第に田舍に入つて行く、風に廻つてゐる屋上の風水車、皆同じ樣な樣式の木

造の西洋家屋、屋前の垣には淡紅色の西洋葵の花が面白く日向に咲盛つて、青い芝生が滑かなカーペットの如く地に敷いてゐる、小兒は電車の路に火戯を仕掛けて、車が走ると爆々たる響は車輪より起り、硝煙紫に散つて乘客は皆眉を顰めて笑ひ合つてゐる。

フルーッベルで乘り換の車を待つてゐる中にも、今日の祭日を野遊に行く紳士淑女連は、ジャバニース、ロメオの異樣なる風體に怪訝の瞳を綠に光らして、耳語き合つてゐる、その中、車が來て、低い生垣や樹葱たる樹林の綴つてゐる間を走る事幾何時もなく、鐵路が盡き、路はこゝから爪先上りに上つて行くのである。

アカシヤの並木の蔭を語り合ひながら上り行きて、空な車を肥えた栗毛の馬に牽かせゆく農夫に逢ひては、彼等の生活の慰安多さを羨み、溪流の傍の青ペンキ塗の二階屋を指しては、化物屋敷なりと管野君の敎ふるに、何となく一種

譯的の好奇心を牽き、船長隱棲せりといふ木小屋を眺めては、興懷そゞろに湧き、かくて一路を廻れば、深き溪流を隔てし黃色の丘の大傾斜の上に、赤く塗れる一大家屋が建つてゐる、狩を業とせる人の住居だとの事、此方の谷の上の傾斜には一隊の鷄群、羽毛の波の如く動き、處々に禽小舍あり、豚小舍あり、悠々たる閑天地、何となく住んで見たいやうな氣持になる、馬車を驅つて野遊に行く連中は三々五々とつゞく、其處から暫らく上ッて護謨の林や、扁柏の林の中を行くと、やがてダイヤモンド、ハイッである、山の麓に廣い牧場があつて、ペンキ塗りの垣が廻り、その中に飴色や斑の牛が呑氣さうに遊んでゐる、加州の夏の特色たる黃色な枯れ草で蔽はれた山々の彼方に、樹葱たる林が蔭を造つてゐる、あそこがミラーの山莊のある處で、あの林は廣袤約六七百エーカー、ミラーが廿年前自ら鍬を取つて造つた者であるとの事、詩を作るより田を造れといふが、詩も作り、林も造る、ミラー翁の如きは慥に精力に充ちたる一個の野

性兒である、彼の面丰、彼の寓居、いろんな事を心に描きつゝ、坦々たる道路を上つて行くと、數十の肥大な牛の群が雲の如き黄塵と雨の如き蒼蠅とを齎らしつゝ、上から驅け下りる、牧童が一人でそれを御してゆく。

アカシヤの樹の蔭にヴアイオリンが鳴つてゐるので、のぞいて見ると、頭の禿げた老人夫婦である、處へ一方の青く塗つた家の中から中年の紳士が出て來た、管野君の知人でエールの出身ドクトル、ウイルソン氏である事を紹介され、手を握つて別れたが、そこの垣の中からがもうミラー翁の邸宅内になつてゐる、黄な芥子の花は、もう色萎せて、枯れ草が足元にもつれ付くが、少し上ると、屋の頂の尖つた、白いペインキ塗りの、いはゞ田舍の小い會堂とも見るべき小家が一方に二棟、少し離れて楊柳の濃い蔭を造つてる處に又一棟建つてゐる、楊柳の下には粗末な車が車輪も泥に塗れたまゝ置いてある、そこが管野君の家だ、天井も低く、床も黑く、暫らく洞穴に入つた樣な氣がしたが、やがて冷

い水で體を拭き、下の襯衣を脱いで、日向に投げ出して乾かして置いた、その中、管野君の友人久家君は病後の身のいかにも脾弱さうな顏色で出て來た、三年前渡米、今はミラー翁の許に寄寓してゐるとの事、ここに忽ち日本人のホームが出來て、談にいろいろ花が咲いたが、今一人、翁の許に寄寓してゐる彫塑家のボイエル孃も訪ねて來て、今水仕事をして手を濕らしてゐると云つて、暫らく躊躇の後、握手をして初對面の挨拶をする、暫らくすると、汚い土に汚れた仕事着を着た、灰色の髯の長い老農が鍬を手にして、家の戸口に立つた、あれがミラー翁だといふので、自分は匆惶、白シャツを着かけてゐる、とその中、翁は彼方へ去つて了つた。

管野君と久家君とは、晝飯の準備をやりに戸外へ出たが、暫らくして歸つて來、ミラー翁に紹介するといふ。

導かれて彼方の小い家の戸口を入ると、そこに、床の前に少し洗ひ汚味の出て

る白い外套を着て、海老茶色の、金筋の古びた、縁のない帽を冠つて、茫々たる灰色の髯、胸を掩ひ、赫味を帶びた顏の、眼光の爛たる老詩人は立つて余と握手し、歡迎の辭を述べた、余も老詩人を見て、歡情胸に溢るゝ由を云ひ、暫らく何彼と物語つたが、老詩人は雲霧常に多き此の山の怪靈に憧がるゝが如く、雲中、聲を擧げて神と語れるモーゼを慕ひ、天地の深秘に入與する事を語るさまの、何となく舊約時代の豫言者を見る思があつた、余等が倚れる翁の床は英の女皇ヴイクトリヤ陛下が翁に賜ひし處のものとか、翁の手に燦々たるダイヤモンドの指環は、嘗てナポレオンの指頭に輝きたるものなりとか！。

翁は一個、無冠の帝王たる名稱を事實にし得てゐるのである、翁は別に多く書物を讀まぬ、舊約聖書唯一卷、彼の勉强室に置いてある、彼は創世記を以て偉大なる詩なりとし、ヨブ記を以て世界の大文學と崇めてゐる、かくて鳥の聲、虫の音、溪流の音、林の囁き、雲や、霧や、岩や、月や、星や、此が彼の讀む

べき書物である、彼を敎へてる師匠である、自然を以て自分の勉强室だと云つてゐる、翁は、午頃まで床の中にゐて、仰向けになつたまゝ詩を作る、加州特有の濃厚な雲霧が林の中に流れ込んで、山莊も何も見えなくなる、そんな時には神興來りて翁は屹度作詩に從事してゐるといふ、火は蝋燭を用ゐて、ランプを用ゐない、それでも管野君が古く煤まみれになつた洋燈を取り出して、掃除しかけると、そのまゝ置け、それは二十年の歷史を語るものであると云つて止めたさうである、桑港邊の大紳士、大淑女が綺羅を飾つて、面會に來ても、翁は床の中で、寢たまゝ挨拶する、前の芥子畑の花を取りに、若い女等がまぎれ込むと、客があつても、なくても構はず、殆んど半裸體のまゝ床から飛び出して叱り付ける、加州大學の總長を落花生實と罵り、スタンホルド大學の總長を薯だと綽名してゐる、加州では兎角受けが惡いといふが、何處までも豪放不羈、世にすねてゐるところが、翁の價値だといふ事である。

かくて余等は、野薇薔が葡萄棚の如く架を作りて、自らなる綠色の帷幕を張り、一方は小い溪に臨んだ處に入る、荒削りの、もう黑くなつた板の卓、板の腰掛、そこが食堂で、第一目に附いたのは米國の歌の譜なんぞを印したナフキン、それからパン、サラダ、シチユウの御馳走が並ぶ、翁はやがて出て來りて椅子に倚る、ボイエル孃も翁の横に床几を据えた、カリルニヤ、ポピーの花が一々分かたれて、各それをボタンの穴に挿む、翁はもう大分葡萄酒に醉つて、赤い顏をしてゐたが、しきりに余等に勤めて、自分で酌をする。

かくて翁は、後山の疎林、影を作つてゐるのを見上げ、自分は廿年前、この山に居を定めたが、その時は、自分が勝手に繩を張つて行けばそれ丈自分の領地になつたものだ、その時は唯の草山であつたが、自分が樹を植え、溪を穿ち、道路を造り、今日は斯樣な有樣になつた、鳥も來て、樹の梢で歌ひ、人も來て、溪の水を飲んでゐると、孫子の成長を誇るやうな情で語つてゐる、然り、翁は

第二の造化翁であると、自分は洒落れた、菅野君も久家君も笑ひ出す。

翁は又、日本人は好きであるといひ、彼等は最大の國民ではないが、大なる國民であるといふ。

トルストイ翁は如何と問ひしに、彼れは偉大也、されど、彼よりもユーゴーは更に偉大なりしと答へ、又現時米國文壇に於ては、マクー、トエンを偉なる作家なりと揚げてゐた。

その中、垣の外の、路傍に集まつてゐた野遊連の中から、若い紳士が垣の中へまぎれ込んで、溪流の彼岸の水道栓から水を呑まんとして、コップを借りに來た、暫らく呑んでやがて返しに來た時、翁は清興の妨げらるゝをうるさしと思ひ、再び來るなと叱した、紳士は Farewell! といつて、歸つたが、やがて垣の外で、若い女や、若い男の聲が騷々しく響く、翁はうるさがつて叱りつけると、彼第は愈〳〵やや〳〵と騷ぎ出す、唱歌をやる、火戯をやる、中にも、ア

メリカの若い女の、鋭い聲で笑つたり、唱ふたりするのが一段耳に附く。

翁は余等に向ひ、今日は米國の獨立祭にて、皆が醉うて騒ぐ、乞ふ氣に留めるなと、度々繰返して陳謝するやうに云ふ、自分も日本の天長節の事を云つて、決して何とも思はぬといつた、翁は尙も、彼等は惡しき人民ではない、善良なる心を持つてゐるのだと辯駁をつゞけ、自分で唱つたり何かしてゐたが、外があまりやかましいので『馬鹿者』と叱る、その中、山羊の毛皮のズボンを着けた、翁の所謂山羊の人の菅野君が、水瓶に清泉を盛つて、彼れ等の處に行き、思ふさま供給してやると、彼等は靜まつた。

この一場の光景は、亞米利加の實利社會と、翁の詩人的生涯の激しいコントラストを眼前に見る心地て云はん方ない感慨が起つた、何を食ひ、何を飲み、何を着んと、それ許りにあくせくしてゐる米國の俗世間の眼から、汚い、白い外套、綠の野中に立てる食卓、林の中の小屋、こんな者を見たら、定めて侮蔑

と嘲弄との情が激しく爆發せねば止まないだらう、世間と超世間と、常識と非常識と、この二つの世界は、夜と晝との如く、常に相反き、水と火との如く、常に相爭うて、何時まて其執を一にしないのだろうか？。

かくて翁と握手し、余等は菅野君に導かれ、翁の經營に成れる林の中の道を辿つてゆく、アカシヤ、扁柏、槲、護謨等の樹木、鬱々たる蔭を造つてゐる、小山の頂上に上つて、雲衢、大波濤の如くたゝまれる下より桑港灣の水、鈍色の錫の如く光れるを遠望し、低き丘と丘との間より、小い市街や、黄色な廣い野がパノラマの如く展開してゐるのを眺め、軈て草山を上るとそこに石垣を畳んだ燔祭の壇がある、この上て、翁が永眠の後、其の屍體を燒き、烟を天に立昇らしめよと、かねての遺言てあるさうだ、傍らに平い黑い石が轉がしてあつた、其上には "To the unknown" と刻み付けてある、これは翁の生前の墓てある、その後の、丘の林の中に墓地を劃し、先年の冬歿した翁の母の墓がある

が唯一塊の石である、翁の娘で、數年前歿した女俳優の墓もある、日本人某の墓もある、芥子の花の濃紅なるが日に透いてあはれげに咲いてゐる。

翁はインヂアナ州の出生で、九才の時父母に從つてオレゴン州へ移り、二十歳の時、金鑛熱に浮かされて加州へ來て、金抗で勞働もやつたさうだが、後オレゴンの『デモクラチック、レジスター』誌の記者となり、矯激の議論を吐いた爲め、雜誌は發行禁止の厄に罹つた、後法律を究め、辯護士、判事に歷任したが天性詩人たるに適して事務に適しない、友人等は翁か『オレゴン高等法院判事』の椅子を求めたるを嘲笑して『寧ろ詩にのみ凝り固るがいゝ』と云つた、けれども翁の自信はなか〳〵偉大で心中『少くとも大詩人たらずんば決して大將軍、大判事、大辯護士たり得ず』と云つてゐた、三十歳の時、倫敦に赴き "Songs of the sierros" を出版し、忽ち有名な詩人となり、アメリカン、バイロンの賞讃を博し、スキン、バーンと共に肩を並べて王宮に出入するの榮譽を得た、元來、彫

琢至れる雅醇なる英國詩壇の眞中に、芋を投げ出したやうな野性的な詩を紹介し、太平洋沿岸の荒々しき野性のまゝの自然人事を唱つて、よく眞に迫つたのが英國の人氣を博し得た一原因であらうとの定評のやうである、他に

Slip in the Desert (1885)　　Shadows of shasta (1881)

Memorie and Rime (1884)　其他十數篇要するに "Songs of the sierras" の系統を引いたものであるさうだが、彼の詩の特色は材を太平洋沿岸の自然の風色に取り、且つ太平洋沿岸の黃金熱—物質主義に對し反抗の聲を擧げ、名利を壓して自然の懷に悠遊せんとするの思想

I were better to be Content and clever,
In the tending of cattle and the tossing of clover,
In the graring of cattle and growning of the grain,
Than a strong man strivingfor fame or grain,

等が其主要なる調子であるといふ、猶他に翁が異人種に同感を寄せる事の深いのは其の特色で、若い時にはインヂアンと格闘などやつて毒矢を右の腕にうけた事もあるが、後インヂアンの娘と結婚し一子を擧げたさうだ、それが死んで後白人と結婚し、更に一子を擧げたのが彼の墓地に眠つてゐる女俳優である、翁には二三の戯曲の著作もある、支那などにも翁は大に同感を寄せてゐるといふ事であるが、兎に角、翁は今や米國第一流の詩人である事は爭はれない。

一昨年のクリスマスに公にせられた "Building of the city beautiful" といふ散文詩は大分世に歡迎せられた樣子で、それにはこの山丘などが舞臺に取られて、餘つ程宗教がかつたものであるといふ、所謂 City beautiful の天國の門なるものを見たが、簡單な冠木門風の建物、唯ペンキ塗りであるのが西洋臭味である、猶、奥には、モーゼの紀念尖塔がある、外にブラウニング、キーツ抔の紀念塔も建つてゐる、山犬の鳴くといふ草生の丘を下り、畫も小暗い赤木

の森蔭に入ると、溪流である、石黑く水白く、木いちご實り、草花咲き亂れ、深山幽谷に入るの思がある、道を迂廻して歸つて來ると、例の葡萄の棚の下で翁は余等を迎へ、自ら肱掛椅子を立つて、余に腰をかけよと勸める、云はるゝ儘に坐つたが、その中溪流の岸に樹枝を叉みて架を作り、下には枯柴枯枝を盛んに燃やし立てる、何が始まるかと思ふと管野君等は木を削り、それに牛肉と玉葱とを交互に刺し、軈て火の上で炙り出した、ボスエル嬢も手傳ふてゐる、ミラー翁は、日本の北土の名を問ひ、然り、サガレン……サガレンの女の如しなどゝ洒落れ、尙頻りに彼女を指して beautiful と云ふ、余も微笑して頷いた、嬢は三十二才との事だが、モザイックなどに見るやうな曲眉慈眼、鼻隆く色白く、誠に印象のハッキリした婦人で、身には支那婦人の服の樣な袖のない衣服を着けてゐる、管野君が代つて炙ぶり出すと、彼女は、手に二茎の芥子の花を持ち來り、友人と余に呉れて日本では何と云ふか？と問ふ、罌粟！と答へて友

人も余もボタンの穴に挿む。

その中、余は椅子を翁に讓り、食卓を圍んで何かと語り合つたが、翁は、余をあまり沈思的だといふ、余は別に何にも辯解せなかつた。

翁はこの月の十五日、オレゴン州に、オーキン、ミラース、デーが催されて西部の文士記者が集合し翁を祝するの祭日がある、それに招かれて近日發途するとの事だが去年は千人の人々に兩手で握手したそうだ、尙、月に日を定めて桑港邊から文士や記者が翁の山莊に集まり、炙肉飲酒、一日の清興をやるとの事を聞き、日本の文壇にもかゝる事の行はれん事を希望するの情に堪へなかつた、殊にミラース、デーに匹敵して、逍遙日や露伴日の行はれないのは甚だ遺憾な事である。

肉が炙られると、翁は鐵刀を揮つてこれを人數の六つに截り、赤いカラシを指で摘まんで、皆のへふりかける、ボスエル嬢は辛過ぎると云つて拒む、久家

君は、翁の指の眞赤なのを見て、マクベスが來たと洒落れる。

百年前は肉叉の代りに、指でやつたものだと翁はインヂアンの風俗など物語へて、しきりに葡萄酒を酌いてくれたが、其中ボスエル嬢は握手して自分の家に歸つて行く、友人と余とはアカシヤの間に銀色の月が出たのを見て喜んで眺め入り、暫らくして座に歸ると、翁は管野君の友人が呉れたといふ、古けた日本刀を持ち出し、しきりに得意げに振廻したりなんかしてゐたが、その中もう床に行くと云つて握手して立つて行つて了つた。

虫の聲がする、月は木の影を草の上に横へて、空は水の如く澄んで來る、管野君に導かれて夢の如く仄かなる水蓮池畔を過ぎ、ポテトー畑を横切り、女小說家の假寓してゐたといふ小屋の前を經て前の小高い丘へ上る、加州の町は蔦色の波濤の如き薄雲の底にかくれて、山々の頂のみが見える、向ふの山の半腹の點々たる火影はセント、シマンスの住む聖村であるといふ。

七月四日で脚下の霧の中では爆々の音がしきりに起り、烽火が雲の波の中から一寸と跳ね出ては消え、跳ね出ては消える、夕の星は高く天上に輝いて人間の手の仕業と自然の手の仕業と、天と地と、あまりに懸隔の甚しいのに今更の如く驚異の感に打たれしむる、余等今高く俗世界に抛んてて祈るべき高壇に立つてる心地がした。

丘を下りて月桂樹の下に入り、數枝を手折りてかへると、馬上に男女が月下の逍遙を試みてゐる、この山に住む澳太利の伯爵の家人との事である。

かくて山を下ると、怪霧一面に四方を立ち込め、顧れば我等が今しも過ぎ來れる護謨木の林のされ間は宛ら一道の瀧の如く、瀧の如く、月の光は白く天上より落ちて、神秘の路を辿つて下る思ひがする、この日は我が渡米以後最も詩神の恩寵に干つた天の祭日である。

（三十九年七月）

紐育だより

着、匆々、紐育を去三十哩の片田舍、プリンストンの學校街へ引込み候て、鳶色の石もて巖丈に壘み上げたるゴシック式の四層樓、窓枠にからみつく蔦の葉の、早秋の氣にしみて稍黄ばめるを打眺めながら、こゝを暫の我が城廓と立籠り候身の、何だか隱者臭く相成り、通りがゝりに高架鐵道、電氣鐵道、地下鐵道、天上地下、晝夜引つきりなしに百雷のはためくが如く、騒々しく、亂りがはしく、うかとせば、蹈み殺され輓き殺されもしかねまじき、繁華熱鬧といふ形容詞を通り越して、科學的魔城とでも謂つて見たき紐育の市街の有樣を思ふと、つい引込思案が先に立ちて、演劇見物に出る勇氣も浮ばざりしが、偶々多年逢はざりし學友い書信に接し、折角の好機なればと、この月の中旬に出かける事と相成り、其節芝居見物も仕候、汗は紐育目貫の大通り、例のブロウド、

ウエー四十街の『帝國座』に米國劇壇の一明星たるジョン、ドリウが演じつゝあるピネロの最近の作たる〝His House in Order〟と題する喜劇を見物いたしたるにて候、この作は、過る一年間英京倫敦に於て好人氣を博し候ものにて、ドリウも其興行に加はり居たる趣に候、筋は至て單純なるものにて、先妻を聖母の如く追慕せる夫フィルマー、及び其の父母、兄、嫂一家族の人人より、種々の輕侮と迫害とを受くる後妻ニナの、飽くまで從順にして家事向に忠實なるを女主人公となし、かゝる一家皆敵の中に、折柄歸省せるフィルマーの兄にして、ミニスターの職にあるヒラリー唯一人、ニナに味方し、其の颯輕なる動作と、痛切なる諷刺とを以て常に一家の人々を翻弄し、最後にニナが、繼子の鞄の中より、先妻が奸夫と遣り取りしたる手紙を發見し、これを唯一の同情者たるヒラリーに示すと、ヒラリーも大に驚き且つ憂ひ、遂に件の手紙をフィルマーにさしつけて、彼が愚かにも、貞操の假面を着け、その實、不義不貞なる先妻の

事をのみ思ひ、この可憐從順なるニナを疎外するの非を說くや、迷夢漸く醒めて、ニナと相抱き接吻するといふが團圓に相成居候、四幕物にて景は凡て屋內、殊に最後の二幕は、同じ一家の居室內の出來事と相成り、景はそのまゝにて演ぜられ候、ドリウはヒラリーに扮し、颯逸奇矯なる性格もよく現はれて、辯舌もいと流暢輕快、さすがは一明星たるの技倆あるやに思はしめ候、女主人公ニナは、女優マーガレット、イリントン是れに扮し、素人目にも其の人に成り得たるやうに見え申候、米國の見物連は、幕毎にいと興に入れるが如く、始終快笑を以て之を迎へ候が、小生等にはあまり變化乏しく、殊に動作といへば、唯安樂椅子と肱掛椅子との、居場所と變へる位に留り、主として巧臺辭の劇なれば、耳慣れぬ身の興味一層少く、何だか芝屋小屋の角を通つたやうな氣がしたといふ位が、正直な處、第一印象に有之候ひし、本鄕座遊などではとても治まるまじく、大向連は電車燒打の二の舞に劇場燒打などを始はせずやと、

ひそかに苦笑を禁ぜざりし次第に御座候、尤も所謂第一印象の事とて、今後如何に小生の對喜劇の感想が變りゆくべきかは別問題に御座候。

この劇の作者たるビネロが『演劇』記者の訪問に答へたる記事中、面白き事項有之候へば、其要を摘み申すべく候。

ビネロの邸宅は、ロンドンのハノーヴアー、スクエアーに有之、而も彼が眞の家として愛着致し居候はサセックスに近き小さき小家にて、二百余年の古き寂びを持てるに心引かされ、數年前買ひ取りたる趣きに候、彼は最近の作の稿を了へて後、夫婦づれにてこの家の中にて靜閑を樂み居る由に御座候。

彼は『演劇』記者に語りて曰く、余は實に廿五年間間斷なく作劇に從事せり、人若し休息を要する者ならば余の如き、將に休息して可なるべきなり、余は人一倍、文學的著作を難事業なりと思へ、劇場に上さるゝ脚本の凡てに余の最良盡さんとする間斷なき努力によりて始んど凡ての精力を消盡し、今や全く疲れ

果てぬ、こゝ數月間は休息すべし、今後も一年に一作以上書かざるべし、否それすらも覺束なし、余は過去の興行權より充分の收入を得るが故に、自ら氣の進まぬ仕事をせでもよし、近頃余は、劇場へ行くが嫌になれり、余自身の作のぜられつゝある時ですら猶且つ然り、人々の劇場に行くは娯樂の爲なれども余には一箇の職業なり、されば劇場は余にとつて少しの娯樂を與へず、余は寧ろロンドン市中をぶらつき、又は此周圍の小山や、樹林の中を散歩する方大なるインスピレーションを與へらるべしと、最後に彼は英米劇壇の不振を說いて、政治や戰爭や國際事件が、國民注意の燒點たる今日、劇の衰頽は已むを得ずといふ。

兎にも角にも歐米劇壇一方の勢力たるこの作者の口より、一年一作の語を聞くが如きは、今更ながら日本文壇に取りても一の警鐘たるの感有之候はずや、殊に職業としての劇は余にとつて快樂に非ずと云ふが如き、何んとなく一種の

サジエッションを與へられたる心地致し候。

尙この劇場のマネージャーたるチャールス・フローマンは紐育市に於て他の二箇の大劇場を支配し、英京倫敦に於ても三大劇場の支配人たる辣腕家にて、英米劇壇の大守田と申すべき人物と相見え申候。

演劇の季節も已に近づき候、外國の名優としては、彼のエレン、チリー孃も來るべく、沙翁の諸劇も演ぜらるべく、殊に例の『沈鐘』がジュリア、マロー等に依つて開演さるゝと聞ては、紐育の熱鬧の氣にかけては居られぬやうな心地致し候、その中追て御通信仕度、取りあえず右のみ匆々。

（三十九年十一月）

米國の新社會劇

米國程物質文明の盛んな處はない、從つて精神文明の發達もこれが爲めに多少歪形にされてゐる傾向がある、文學藝術の方面に、歐洲大陸のそれと肩比するに足る丈の產物がまだ出來ないのは、勢の然らしむる所といふべきであろう。

演劇などゝ劇場の數や、俳優の數はナカ〳〵多いが、新らしい興味のある劇はあまり演ぜられない、先頃物故したクライド、フィッチだの、又ジョージ、エードだの、ダヴキッド、ベラスコ（兼劇場支配人にして俳優）などいふ通俗作者の滑稽劇や、メロドラマが一般の趣味を支配してゐるといふ有樣である、併し三四年前からイプセンなどの影響を受けて、今までの劇とは多少行方を異にした、內容のある、幾分人生に觸した作物がポツ〳〵一部の劇物に上演せられる事となり、殊に昨四十三年に開場された新劇場などのレパートリー式興行法

サジエッションを與へられたる心地致し候。

尙この劇場のマネージャーたるチャーレス・フローマンは紐育市に於て他の二箇の大劇場を支配し、英京倫敦に於ても三大劇場の支配人たる辣腕家にて、英米劇壇の大守田と申すべき人物と相見え申候。

演劇の季節も已に近づき候、外國の名優としては、彼のエレン、テリー嬢も來るべく、沙翁の諸劇も演ぜらるべく、殊に例の『沈鐘』がジュリア、マロー等に依つて開演さるゝと聞ては、紐育の熱鬧の氣にかけては居られぬやうな心地致し候、その中追て御通信仕度、取りあえず右のみ匆々。

（三十九年十一月）

米國の新社會劇

米國程物質文明の盛んな處はない、從つて精神文明の發達もこれが爲めに多少歪形にされてゐる傾向がある、文學藝術の方面に、歐洲大陸のそれと肩比するに足る丈の產物がまだ出來ないのは、勢の然らしむる所といふべきであろう。

演劇などゝ劇場の數や、俳優の數はナカ〳〵多いが、新らしい興味のある劇はあまり演ぜられない、先頃物故したクライド、フィッチだの、又ジョージ、エードだの、ダヴキッド、ベラスコ（兼劇場支配人にして俳優）などいふ通俗作者の滑稽劇や、メロドラマが一般の趣味を支配してゐるといふ有樣である、併し三四年前からイブセンなどの影響を受けて、今までの劇とは多少行方を異にした、內容のある、幾分人生に觸した作物がポツ〳〵一部の劇物に上演せられる事となり、殊に昨四十三年に開場された新劇場などのレパートリー式興行法

が行はるゝ事となつて、新氣運が動き出したやうに見える、これが果して米國劇壇に一新紀元を劃し得るまでの趨勢を作るに至るか否かはまだ一疑問に屬するが、兎に角注目に價する現象たる事は確かである。

かゝる新作家の中に、その先聲をなしたと稱すべき者の一は、チャーレス、ラン、ケネデキーの『その家の僕』(サーヴァント、イン、ゼ、ハウス)がある、米國の名優兼劇場支配人たるヘンリー、ミラーが配下の諸優に依つて千九百〇七年—八年の時季に紐育のサヴォイ座に上演せられ、近來稀れなる大人氣を博して、約一ヶ年に亘り興行された、のみならず、昨千九百十年、英京倫敦で復活されて、大喝采を受けた、又、ユーゲン、ウオルターの『全拂』(ペート、イン、フル)は前者と同時に初興行が行はれ、紐育のアスター座に於て百日以上、或は二百日にも及ぶ程の大人氣を博した。

『その家の僕』の作者、ケネデキーは元來英國の俳優で、且つ學者である、劇中の舞台も英國に取つてあるが、始めて此作の價値を認めたのはミラー一座の

「その家の僕」と「全拂」の舞臺面

俳優ウオルター、ハンプデンて、又此作が初めて上場されたのは紐育のサヴオイ座である、作者もその頃から紐育に來て爾後同一座の爲めに執筆するやうに云つてゐたから、此れを米國の新社會劇の一と稱して差支なかろうと思ふ。

ケネデキーはソホークルス、及イブセンに深く私淑してゐると語つてゐる、その言の如く『その家の僕』は形式、結構に於て全然イブセン式である、乃至ソホークルスの感化を受けたるイブセン劇の形式に適合してゐる、又篇中の主人公たる『その家の僕』マンソンに扮せる俳優ウオルター、ハンプデンは彼のイブセン女優ナヂキモヴ夫人の『マスター、ビルダー』劇中のソルネスに扮して成効したる一名優である。

乍併、劇の内容は必ずしもイブセン式とは云へない、殊にマンソンが耶蘇基督の標象化として用ゐてあるのなどは、標象主義といふ手法に於てイブセンに學んでゐるとは云ひ得るものゝ、劇の調子をして中世的ならしめてゐる、而も此

の耶蘇基督の標象化が大人氣の一原因となつてゐるのであろう、又此の作の敎會攻擊といふ點は、一見イプセンに似て、而も用ゐてゐる武器は全然異つてゐる、今その梗概から紹介して行かう。

場面は全劇を通じて變化しない、牧師の家の一室、凡てジャコビアン風で、槲の壁板、輝く天井、古風の家具が配置されて、歷史的の趣味が溢れ、富有人の室の樣であるが、その壁板の上の十字架、神聖なる母子の古畫、及び近代の宗敎的の油畫などを飾り立てゝゐる樣子は、『富める者は天國に入り難し』といふ難問題と、コンプロマイズしてゐる事を明かに示してゐる。

室の大戸は舞臺の後方の、略中央に在る、一方には、牧師の書齋が見える、室の左手にはジャコビヤアンの古風な暖爐がある、大戸の右手には、低い棧の入つたガラス窓があつて、靑い空に會堂の高い塔が見透かされ、中央には椅子、

安樂椅子などが置いてある。

（第一場）カーテンが上ると、侍童のロガーと、マンソンとが、朝餐の卓を調へてゐる、ロガーは觀客の方に面し、印度人の服裝を着けたマンソンは背を見せてゐる。

ロガーはマンソンに向ひ『妙な事があるてす、私は以前、何處かで、君を見たやうな氣がしてならんですが、何うしたのでせう？』。

マンソンは沈着な調子で『この世の中には、いろんな事があり得るものです』

ロガーは頷いて、『そうです……然し君は何れ位、英國に居られたのでせう？』。

マンソン『私は、昨夜、船から上つた許りです』ロガー『成程、然うですね、……私は、君の來られた亞細亞の地方に居た事はないのですから……』、マンソンは、傍の卓に行き、そこらの器具を扱つてゐる。

ロガー『ぢやア、日刊の新聞紙で、御目に蒐かつた事のあるのが、再權化

された譯でせう、再權化？』と、旨い事を考へ附いた樣子で、『ねえ、マンソン君、君も僕も昔、一度主となつてバビロンに現はれた事があるのですね』。

マンソンは相不變、嚴な調子で『そして、今は侍僕や、侍童となつてるのですか？』。

ロガーは、頭を掻いて『少し、身を卑下し過してるやうに思はれますな、然うぢやアないでせうか？』マンソン『それも一つの見方でせう』。

此時、ロガーは、ジャムを一匙、口に入れやうとする。

マンソンは振向ても見ないで『ジャムは、庖厨にないですか、ロガー君？』。

ロガーは吃驚し『靴に眼が附いてると見える、……マンソン君、君はこれを盜んでると云ふのですか？』。

マンソン『君は盜まうと云ふのですか？』。

ロガーは、匙を捨て『君はいゝ事を忠告してくれた、お庇で過失を免かれた

……一つ問ひたい事があるが、君は何うして、そんな服裝をしてるのでせう、此所は印度ではないです』。

マンソン『人は、私のこの服裝にしか眼を付けてくれないです』と云つて、此時、始めて、顏を見せる、柔和て、威嚴も含み、威力もある、基督の相貌である、マンソンは、サン、ノフ、マン、卽ち人の子である。

かくて、牧師の聲が聞え、程なく戸口から急いて入つて來る、黑の法服を着げた四十前後の男盛りてある、卓の左手に坐す、侍僕、マンソンは廻つて、牧師の傍に近寄る。

牧師は、その顏を見て驚いてゐる、ロガーは新しい侍僕マンソンてあると紹介する。

牧師は頷いて『成る程私は何處かて見た樣な氣がする』

マンソン『然うですか？』牧師『然し、思ひ出せない』と云つて、ロガーの

持ち來るパンを器械的に取つて『不思議な事もあるもんだ』……と考へ、考へ

『兎に角、善く來てくれましたね、マンソン君、君は何時着きました？』。

マンソンは『今朝參りましたが、稅關て少し、手間取りました』牧師は善く英語が話せると云ひ『私の舊友が、君が忠實に、家内働きをしてくれたといふので、僕に推薦して寄越した、牧師の一家族の中で、何が中心點であるかは君が認めらるゝ事と思ふが、友人は君の宗教は何とも云つて寄越してゐない』。

マンソン『私の宗教は、極めて單純なものです、私は神と、私凡ての兄弟とを愛します。』

牧師『神と、兄弟』と云つて、立つたまゝ、少し考へに沈んだが、『それは容易な事ぢやないです、併し、マンソン君、僕の信條も君と同じです』。

マンソン『ぢやア、兄弟です』と云つてさし出す手を牧師は器械的に握る。

マリーが入つて來る、十二三才の少女で、薔薇のやうに美しい、可愛い顏色

てある。

『ハウ、ドウー、ユー、ドウー、マンソンさん、私はメリーです』と握手する。

マンソンは、メリーの手に接吻する、マリーは半分、無邪氣に、半分、大人びて、私等は昨夜、貴方の宗旨は何んだろうと思ひました、私は云ひましたの……』。

牧師は『マリー！』と云つて制する。

マリー『貴方は、食人肉のやうには見えません、惡魔だつて、そんなに黑い面をしちやアゐませんのね……オー、御免なさい、私は、亂暴ですね』。

牧師は窘め、マンソンには氣にしてくれぬなといふ。

マリーは、マンソンに向ひ『叔父さんは、今日來るお客さんの事を貴方に云ひましたか？』。

マンソンが『否』といふので、『叔父ジョーの事を云ひませんかつたの？』。

牧師『叔父ヨシュアをそんなに呼び捨てにしては失敬だ』といふ。

メリーは、マンソンに向ひ『叔父さんのヨシュアには他の名があるの―、汝が此の世界で一番豪らい人と思つてる方の名を考へ出して御覽！』。

マンソンが冷淡に『然うですか？』といふので、マリーは『分らないの？汝はベナースの監督の事を何う思つてるの？』。

マンソンは驚いた樣子もなく『ベナースの監督ですか？』。

マリー『汝、聞いた事があるのでせうね、印度から來られるのよ』。

マンソン『知つてゐます』。

牧師は『自分は、少い若者であつた時に見た許りだ』。

マリーは『マンソンさん、その人は、私の叔父さんなのよ……父さんの兄弟なのよ』。

マンソンはマリーに向ひ『ぢやア、マリーさんの？』。

牧師は、遮るやうに『姪は、私の、他の兄弟の娘です』。

マンソン『成る程、二人兄弟を有つてゐられるんですね』。

牧師は、教會へ行くと云つて、戸口の方へ出る、ロガーも蹤いて出る、後へは、マリーとマンソンとが殘る、二人は椅子へ凭けて話をし、マリーは監督の事を問ふ。

マンソン『叔父ジョーの事ですか？』。

マリーは氣を揉み『叔父のウヰリヤムが、叔父ジョーとは云ふなと云ひましたから？』それから、叔父は善い人だろうか、それとも、伯母の兄弟の、ランカシャーの監督の如き人なのだろうか、ウヰリヤム叔父は、あの人の事を惡魔と云つてゐた。

マンソン『貴方の叔父のヨシュアの評判は、然うではなかつた』マリー『皆がよつ程、あの人の事を善く云つてゐますのね』といふ、マンソン『或人が惡

く思はせるやうにしてゐます』と聞いて、マリーは『誰なの、それは？』マンソン『重に僧侶達です』マリーは少女の怒を見せて『悪い人ですね』マンソン『イヤ、唯、盲目なんです……そして、少し聾です、そんな人が中間に入つてゐるので、仕事が困難になつて了ふのです』。

マリーは、怠慢だからといふ、マンソンは、それ許りでない、彼は他の主人に仕へてゐる、ランカシャアーの監督などがそれだといふ。

マリーは、叔父が印度で崇拜を受ける許りに、人々に尊敬されて居り、大教會を澤山建てたといふ事だがと聞く、マンソンは『教會は唯一つしか、建てない』といふ、マリーは熱心な調子で『汝はそれを見ましたか？』マンソン『あの方がそれを建てる時、自分は始めから見てゐたのです』マリーはマンソンを見上げて『私は叔父さんを好きたいと思ひます、叔父さんは、汝のやうな人なの？』マンソン『貴方は何うして叔父さんの事を知つてないのです』マリーは

『唯つた、昨日聞いた許りですから』マンソン『貴方は、人が皆知つてると云つたやうでしたが』マリーは、照れて『それだつて、私は何も知らんかつたのですもの、父さんの兄弟と云ふ事もね……』マンソン『貴方のお父さんも？』マリー『誰、私のお父さん……私はまだ私のお父さんを知りません！』。

マンソン『それは妙です』と訝つてゐる。この邊、凡て基督と今日の教會、及び基督信者との關係を、抽象的に描寫したものであるといふ暗示を含んでゐる。

マリーは、それから、會堂が古くなつてゐるので、叔父ウキリヤムは、その修繕の爲め、寄附を募る手紙を出したが、その返事に、教會の土臺石が悪いといふ者もある、窓ガラスの汚れてるのがいけぬといふ者もある、私は何んだか、教會の中に入ると悪い臭氣がしてならぬやうに思ひます、人が教會へ來なくなつたのはその所爲だろうと思ひますといひ、『叔父ウキリヤムが昨日、新聞を讀

んでると、ペナースの監督の事がある、この人の力の一部分でもあつたらと高い聲で話しますと、恰當郵便配達が來て、ペナースの監督の手紙を投げ込みました、神　譚のやうな事です』。

マンソンは、メリーが見せるその手紙を取り上げて讀む、『明朝、汝の許に行き、教會修繕の事に助力する』との意である。

マリーは『叔父のヨシュアは印度へ行つて、後、行衛不明となつた人である』が、その人から昨日手紙が屆き、その人が今、汝の居る處へ坐つて、』と云つて、偶と、妙な感に打たれたやうに『汝は誰れです？』とマンソンを見上る、マンソンは『私は……』教會の鐘が鳴つて、聲が聞えなくなる。

マンソン『私は、此の家の僕です』といふ。

牧師夫人アンテヰが入り來り、マリーと來客の事など話す中、マンソンは郵便を取次ぐ、ランカシャアーの監督が來るといふ報知である。

此時牧師は入來つて、考へ込んでゐる、夫人は心配して聞くと『自分は嘘言者だ』と、苦悶の色を現す。

夫人は何うしたのか？と問ひ宥め『教會修繕の金の心配か？』といふ。牧師は、そんな事ではない『兄弟のロバートの事だ』といふ。

ロバートはマリーの父で十五年以前より音信不通の『人外者』である。昨日訪ねて來るといふ通知があつたのを、電報を以て斷はつてやつたのである。

二人の對話中、鈴が鳴る、ランカシャアーの監督であろうと、夫人は云ひ、夫が常に、マンモンの監督と罵つてゐるので、今日は『クリスチャン』として、待遇つてやつてくれ、金の相談に乘つてくれる人だからと云つて、外づす、戸口から入つて來たのは、『人外者』の、ロバートであつた、汗と垢とに綺れ〳〵になつた上衣を着て、髮は蓬け、顏色は酒照りがし、下等勞働者の風采である、

牧師は、ロバートを見て『何の爲めに來たか？』といふ、『娘を見たいから來

たんだ』と、牧師を睨むやうにする。

牧師は、徐ろに、歩んで出て了ふ、ロバートは、マンソンを顧みて牧師を罵る。

マンソン『兩方共、愚て、罰せられるべき人だ』といふ、ロバートは始めて、マンソンの顔を見る。(カーテン)

(第二場) 場面は變化せぬ、ロバートは、衣服が濡れたといふので、マンソンは助けて脱がせてやり、火の前で乾かし、假りに牧師の法衣を取つて着せる、ロバートは兩手を擴げて見るなどの所作がある、それから食卓に就き、ムシャ〳〵と飢渇を滿しながらマンソンと、娘の事、兄弟の事などを話して、勞働社會の事に及び『十五年前は、私や、私の仲間は宗教を持つてゐなかつたが、今は持つてゐる、社會主義！面白いぢやアないか？』

マンソン『それも亦私の主義の一つだと思ふ』、ロガー入來り、ランカシヤヤー

の監督が來たといふ、監督は盲目て、少し聾で、聽取器を手から放さぬ、ロバートを牧師ウキリヤムと思ひ違へ、マンソンをペナースの監督と信じ、同じ食卓に就き、印度の監督に、教會再建者の名義を稱してくれゝば、自分が其のビジネスの衝に當るといひ、印度で建つた教會を何うして管理したかと問ふ。

マンソン『犧牲？』と答へる。

監督『勿論……勿論です、併し、實際、非常の費用が要つたといふ話ですが、凡そ幾何圓かゝりました？』

マンソン『勘定し切れぬ程の百萬弗かゝつてゐます』

督督『……ては、宮殿のやうでせう』

マンソン『石や、材木の死んだ物を積み重ねて出來たのではない、活きてゐるのです』

監督は耳喇叭を耳に當てゝ『無數の百萬弗！』

マンソンは空を見上げて『貴方が、その中へ入つて行かれると、一の音を聞かれるでせう、偉大な詩を唄ふ音のやうな……耳を傾けてゐられると、それは人間の心の打つ音だ、人間の靈魂の音樂だと氣附かれるでせう……時々、高い圓天井には、夜中、鎚の音が聞える事もある……』

聞いてる中に、ロバートは何か感じたやうに『汝の敎會には溝渠は無用なのだろう？』

マンソン『イヤ溝渠は、今、大問題になつてゐる』といふ、ロバートは耳にもかけず、起上つて、法衣を脱ぎ、乾いた上衣を着け、監督の耳に耳喇叭を當てさせて『ヤー汝は、地獄の事を聞いた事があるか？』といふ

監督は聞きたいものだといふので『ぢやあ、已れの行く處へ來い、已れは此れから、溝渠浚ひに行くんだ』と云つて出て、行く

監督は『無禮漢！』と罵り『彼の監督に告げてやる』と怒る

マンソン『貴方は間違へてゐる、あれは牧師ではない、掃除人足です』

盲目の監督は驚いて『自分は、そんな者と朝餐を共にしたのか？』と聽き直す。

マンソン『然うです、貴方は從前、そう云ふ事をした經驗はないんですか？』

監督『貴方は自分を何と思つてるの？』と氣色が荒い

マンソン『神の敎會の監督でせう』

監督『貴方は之まで然ういふ習慣をやつて來てゐますか？』と問ふと、マンソンは、『自分は毎朝してゐる、ずつと以前からの事だ』といふ、監督は、併し、今朝の事は『誰にも云つてくれるな』といふ、マンソンは、世間へ知らすべきものだといふ。

やがて牧師夫妻が入來り、ランカシャーの監督が、相手にして語つてゐるのは、印度から來た侍僕だと知れて、監督は更に二度吃驚する。

夫人アンテキーは、ロバートを追ひ出したと聞いて、マンソンに向ひ『汝は私等を助けてくれた』といふ。

マンソン『私は助けやうとしてゐます、併し、貴方が、それを困難にして了はれるのです』、夫人は顏色をかへる。(カーテン)

(第三場) ランカシャーの監督が、マンソンに話があると云つて、二人連れで客室へ行く、後で、牧師夫婦の對話、牧師は、ランカシャーの監督の金は、民の汗と血とを絞り取つたのであるから、自分は手に觸れたくない、娼妓の骨で、神の祭壇の基礎は築かれぬと云ひ、妻のアーンテキーが慰めても氣色が直らぬ、しきりと兄弟ロバートの身の上を氣にしてゐる、妻は『マンソンに云はれてからの事でせう』といふ。

牧師『マンソンは自分に明かに示してくれた……自分はあの人が恐ろしくなつた』

此時、マンソンが、五ポンドの目錄を手にして入つて來る『お客さんが、貴方に逢ひ度いと云つて居られます』

アンテキー『承知しました……』と云つて、マンソンの手にせる目錄に目を附け『それは何んです?』

マンソンは、靜かな調子で『誤解された科料です』

牧師夫妻が入つて行つた後で、マンソンは件の目錄を爐の火に投げ入れる、焰の上るを眺めながら『汝は汝の口を惡魔に與へた、汝の舌は僞を作つてゐる、汝は汝の兄弟に逆らつて座し且つ談してゐる、汝は汝の母の子を誣ひた、かゝる事の數々を汝は行つてゐるが、自分は默してゐる、汝は自分をも汝自身のやうなものと一つに見てゐるが、併し自分は汝に反證を示し、汝の眼前に、凡ての秩序を元の通りに回復して見せる』と獨白する。

程なくマリーが出て來り、マンソンが朝餐の後片附を手傳ふ、やがて自分一

人となつてゐる處へ、ロバートは戸口から入つて來て、父子對面の一場となる、マリーは赤兒の時、父に別れたので、現在の父を然うとは氣附かず、泥棒か何かと思つて、叫び聲を立てやうとして、睨と見詰めて『誰人ですか？』と咎める。

ロバート『御免なさい、御嬢さん』と顏を見てゐる。

マリーは、鈴を鳴らして人を呼ばうとする。

ロバート『間違つてゐます、お嬢さん』と云つて出て行かうとするので『お止まんなさい』とマリーは呼び留め『泥棒は心の底から幸福なものではありません』

ロバートは眼を睜り『私を泥棒と思つてるんですか？』云つて、卓の傍の椅子の上へ身を投げかけて男泣に泣いてゐる。

マリーは、雄々しく『二度とこんな惡い誘惑に陷つてはいけませんよ、泣かなくてもよござんす』

ロバートは赤くなつた眼を上げて『泣いちやゐません、私はこんな襤褸を着てるが泥棒ではない、飲んで飢えて、酷い勞働をするとこんなになる』といふ。

マリー『では貧乏な方なんですね』と氣の毒さうに見て居たが『酒を飲むのは自分で善いと思つてますか？』と聞いて、マンソンに皷吹された人類救濟の理想が小い心に沸き上つた樣子で座り直して『私は貴方に、何か善事をしたいと思つてゐますが？』

ロバート『貴方が？』

マリー『然うです、貴方は私を好かないんですか？』

ロバート『貴方がこの世界で唯一人の人です』

マリーは、喜んで『貴方は私が好きと仰るのは、私が貴方の事を心配してるのが、御分りになつたからでせう』と、小娘が大人びた口を利き、人は自分

ばかりの事を思つてはいけません、他人の事も考へてやらねばといひ『一生懸命に願へば、願が届く』と牧師口調でいふ。

ロバートは『神女譚は信ぜぬ、願ふても駄目だ』といふ。

マリー『何を願つてゐるのですか？』

ロバート『イヤ、云つても駄目です、出來ない事ですから』

マリー『何んです、私も出來さうもない、難かしい事を願つてるのですが』

ロバート『私のやうな難かしい事ではないでせう』

マリー『貴方のは何んですか？』

ロバート『貴方から云つて御覽』

マリー『私は、お父さんが欲しいのです』

ロバート『私のは小い娘の事です』

マリーは、ロバートの顔を見て『娘さんは亡くなつたんですか？』

ロバートは、胸を押へて『まア、私には然うですな……』

マリーは色々と、その娘の事を尋ねる、ロバートは父の事を何う思つてるかと聞く。

マリーは『ウキリヤムや、ヨシユアのやうな人の兄弟だから、私のお父さんは、誰よりも屹度善い人に違ひない』といふ。

ロバートは、それは間違つた考へだ、そのお父さんは悲慘な生涯を送つてるだろうといふので、マリーは『貴方は自分の娘の事を考へて然ういふのでせう、併し、最後には善くなろうから、あまり心配してはいけません……眞實に……自分の小い夢を取つて下さるな』と、顔を背けて泣き出す。

ロバート『泣きなさんな、お嬢さん……貴方の御親切は身に泌みました』と眼を拭いてゐる。

マリー『貴方は何んといふ方ですか、行かれる前に、名を聞かせて下さらん

か？』

ロバート『私ですか……』と一寸と思案にくれてゐたが『私の名なんかいふ丈の價値がありません……左樣なら、お嬢さん』戸口で振り向いて顏を見る。

マリーは走り寄つて、小い手をさし出す、その手を握つて『左樣なら』と出て行く。

マリーは、跡の戸を鎖し、悲しさうな顏を上げる。（カーテン）

（第四場）　マリーが泣いてゐると戸の把手が動いて、中から牧師の聲が聞える、マリーは園へ出る、牧師と夫人とが入つて來て椅子に倚り、ランカシヤアーの監督の、會堂新築に關する新案を論じ合つてゐる。

牧師『あの人は宛て商人の云ふやうな事を口にしてゐる』

アンテキ『貴方は人を皆、理想家と思つちやいけません、ゼームスは實際的の人です、監督です』

牧師『汝は此の世の中には、何んな價を拂つても買はれん者があるといふ事を知らないのかね？』

アンテキー『だつて貴方、煉瓦や、膠泥は、お金を出さないとくれませんよ、お金がなくちや、世の中に立つて行けないぢやアありませんか』

牧師『それは然うだ、併し肉や血は何うだろう、名譽といふものは何うだろう？』

夫婦は理想が違ふので、いろ〳〵と意見が衝突する、妻は、自分の夫の爲めを思つて、斯ういふのだといひ、夫は、汝は偶像信者だ、夫を偶像にして、自分の靈魂の事を忘れてゐる、その偶像も、自分の欲望の塊りで造つたのだといひ

牧師『もう此れから自分は自由人になると決心した、虛僞から自由になり、必要なら愛からも自由になり、汝からも自由になり、凡て自分の仕事の妨害になるあらゆる物から自由になる、私には私自身の仕事がある、汝のてはない』

妻は非常に沈んだ調子で『ウキリヤム、貴方は惡魔に誘惑されたのです』牧師『神からの御思召なんだ』

これから、自分の仕事を始めると云つてゐる處へ、マリーが入つて來る。

『叔父さん、叔父さん、私はお二人にお話ししたい事があります?』といふので、牧師ウキリヤムは、自分も話さうと思ふ事があるが、汝のいふ事は何んだと聞く。

マリー『私は、私のお父さんの事が聽きたいのです』

牧師は、妻の止めるのを耳に入れず、『私が云つて聽かせやう……』といひ、マリーが盜人と見違へるやうな人の話から、父の事を氣にかけ出したと聞いて『他人の子の愛を盜んだ盜人は何んと云つてよいか知ら、兄弟の靈魂を殺した、殺人犯は何んと云つてよいか知ら?』と、自ら煩悶する。

夫人は、それは嘘だと打消し、マリーの父の方が惡人だといふので、マリー

は失望し切つて、『私は一人てす、もう何んにも祈つたり願つたりしません』と云つて庭園へ駈け出す。

アンテキーはロパートが再び來ぬやう澳太利亞へ送れと云ひ、結局マンソンの忠告を求める事になり、鈴を鳴らしてマンソンを呼ぶ、マンソンは裁判官の如く、立つて聞いてゐたが、監督が人間違をして、三人一つ食卓て朝餐を喫した事を話し『貴方の兄弟は少し盲目てすから』といふ。

アンテキー『それで何らしました?』

マンソン『最初は怒られましたが、暫くすると、氣が變つた樣子て、利益勘定の事を考へてゐられたやうです』

アンテキーは怒つた樣子で『汝は驕いた人ね、……私は餘つ程、汝を尊敬しますよ』

マンソン『尊敬ては充分でありません、も少し要求したい事があります』

アンテキー少し周章てゝ『何事ですか？』と問ふ。

マンソン『全き服從と忠勤と愛を要求します』と威嚴ある調子。

アンテキーは氣色を變へて『そんな無禮な事を……汝はこの家の僕ぢアないか？』

マンソン『否、此所は今、貴方を支配する事務所です、お座んなさい、私の云ふ事をお聽きなさい』

牧師は『これは、我々を救ふために送られた人だ、この人は神だ』と、敬虔の情に堪へぬやうな顏色で、嚴肅の態度で立つてゐる。

アンテキーは、器械的に、安樂椅子の上へ腰を卸ろして、自らも謹ましい樣子になる。

アンソンは、アンテキーが夫の兄弟を濠太利亞に遣るために、自分の手を藉ろうとしてるのだといふ事をすつかり知つてゐると告げ、それが夫や、娘を幸

福にする途ではない、自分を一時間、この家の主人にしてくれたら、萬事秩序を立てゝ、圓滿の解決をすると云ふ、牧師に異議はない、アンテキは漸く頷く、處へ、ランカシヤアーの監督が手紙を手にして入り、協會の書記の處へ、萬事好い都合に說明して書いてある……』といふ、マンソンは、耳喇叭を監督の耳に當てゝ『主人からの命令です……何卒、此家を立去つて下さい』

監督は大に怒り、無禮の數々を上げ、妹と絕緣すると宣言し、罵詈の言を浴びせかけて、杖と帽子とを持つて駈け出でる、マンソンは戶を閉めて了ふ、アンテキーが、泣き入るを牧師は慰める、マンソンは、祝福する如く手を上げる。

（カーテン）

（第五場）牧師夫婦は、マンソンが、ロバートを十分間に、眞人間にすると いつて、入つて行つたのを、奇蹟のやうな事だと云つてゐる處へ、マリーが入り來る。

『お父さんが、何んな惡い人でも、愛したら變つて來られないて事はないんですね、失望したのは、私が惡かつたのです』と、勇氣を回復して、叔父の牧師の說敎の中で、然ういふ事を聞きもしたし、今朝の、盜人だと思つた人に、自分が話しかけて見て、存外優しい人といふ事を知つた事など語つて慰めてゐる、侍童のロガーが報知で、間もなくロバートが、忌な笑ひ顏をして入つて來る、牧師も夫人も、マリーも喜んで迎へる、ロバートは、會堂の惡い臭氣のするのは溝渠が元ではない、墓だと知れた、それを奇麗に片附けるのは、生命がけの仕事であるが自分がするといふ、牧師は感激して、自分のカラー、カフスを投げ捨て『自分も一緒にやる』と、ロバートと握手する。

マリーは『こんな善い、美しい心の人は私のお父さんに違ひない』と云つて、始めて、父子、兄弟の名乘をする、和氣が一堂に滿ち、互に握手し合つて、十字架の形を作る。

マンソンが入つて來て、ロガーと共に卓の上に、花など飾り『ベナースの監督が來てゐられる』と告げる。

牧師は、『や、もう來られましたか?』

マンソン『此所に居ます』

牧師は合點ゆかぬ顏で『何處にです?』

マンソン『此所に!』とつゝ立つ。

牧師は、始めて合點し、跪きて『神の御名に依つて——貴方は何誰です?』。

マンソン『神の御名に依り——汝の兄弟!』と握手する、牧師はすゝり泣きする。(カーテン)

次には、ユーゲン、ウオルターの第一作『全拂』を紹介する。

(第一場) 羅甸、亞米利加汽船會社の集金人、ジョー、ブルックがハレムの

借屋住居、右手には、庖厨へ通ふ戸が見え、左手には寢室が見透かされる、舞臺は客室兼食堂で、ジョーは三十歳前後の青年、渕給の身の、僕婢を使ふ餘裕がないので、自分が白い上衣を着て、食後のテーブルの上を掃除し、それから掃除器械を持出して、ゴロ〳〵と毛氈の上を轉がし廻り、それが片附くと、庖刀、肉叉を磨く、凡てその間の所作は不平だら〳〵で、自分の貧乏生活を果敢んでゐる樣子である。

やがて、若い妻エマが庖厨を片附けて、仕事着のまゝ駈け出し來り、ジョーの上衣を取つてやり、チャホヤ云つて接吻する、このエマの亡父は嘗て同汽船會社の總支配人をしてゐた事があるので、その娘に育つた身の貧乏世帶のやりくりは出來兼るが、それでも不平の色を見せず、忠實に夫を勦り慰めてゐる。

ジョーは、『一週間、二十弗では遣り切れぬ、增給の約束を履行しないのは不都合だ、支配人のスミスなどは增給を受けた癖に』と椅子へぐたりと倚りかゝ

つて膨れてゐる。

處へ會社の支配人スミスが訪ねて來る、彼は四十恰好の、氣輕で、信切な人柄、結婚前、エマを竊に戀してゐたが、今は此の若夫婦の親友である。

スミスは手にせる新聞紙をジョーに附きつけ、富豪の榮華話をする、ジョーは彼等の專横を罵り『自分は集金人だ、使はふと思つたら、この現金を自由にする事も出來る』と、云つて、棚から、金入に納めた弗札を出して見せつける。

支配人スミスはその亂暴を誡め、エマは夫を諫める、ジョーも漸く落着いて、シガーを呉れと、スミスに云ふ、スミスは持合せてゐないからと、自分で買ひに行く。

處へ、汽船會社の社長、キャプテン、ウヰリヤムが、エマの母、ハリス夫人及び妹娘ベスと、三人連れで訪ねて來る、ウヰリヤムは南太洋方面を海賊船で荒れ廻つたといふ恐ろしい經歴附の四十男、顏は赤銅色に光り、眼鋭く、筋

骨逞しく、權力の權化のやうに見える、エマの母ハリス夫人は、利己的な婦人で、もう白髮頭、妹娘のベスはよく喋舌る小娘である。

ジョーは、ウヰリヤムを見て唯、頭を下げた限りで、その場を外す、後で、ハリス夫人は『汝はあんな男と結婚するんぢやなかつたのね』と庇口を利く、ウヰリヤムは相槌打つて『せめて雇婢の一人位は……』と云ふのを聞きはずつて、ジョーは蒼青になつて入來り、ウヰリヤムを詰り、『自分がこんな果敢い生活をしてる譯を云つて聞かせやうか……奴隷商人奴！』と罵る。

エマは、夫を宥なる、歸り來つたスミスも仲に入る、ジョーは耳にも入れずキャプテンが黑人を殺して、餌食としたのを手始めに、いろ〳〵の惡事を行ひ、他人の汗や血で自分の財産を拵へて置ながら、雇人の貧乏生活を彼是、口にする不都合を責め立てる。

ウヰリヤムは忿然として、椅子から起上り『今まで己にそんな事を一言も言

つた者はなかつた』と、進み寄つて、野獸の如く飛び蒐らんとする、人々が兩方を宥める、ジョーは抵抗せんとする身構である、エマは泣目立つて『ジョー！、此家は私等のホームといふ事を知つてゐるの？』この一言で、ジョーは折れて戸口から出て行く。

後で、ウヰリヤムは、エマに辯解し『ジョーは解雇などせぬから安心しろ』と云つて、ハリス夫人等と共に歸る、やがてジョーは入つて來て、誰も居ぬ隙を窺ひ、以前の弗札を再び改めて見て、エマを呼びかけ『これから芝居見物に行くから支度しろ』といふ、エマは喜んで一室に入り、晴着に着替へて出て來る、かくて二人、兩端から一つ、一つ電燈の栓をねぢ、火を消して行つて、舞臺が自然のダーク、チエンジの中に、カーテン。

（第二場）　九月下旬の事、前の借屋住居とは打つて變つて、半上流のホテルの、アツパートメント生活、家具は凡て金具物がギラ〳〵と光り輝いて、ピ

アノ臺の上には譜本が亂れ散ばり、飾りランプの燈火が華やかに、一室に照り渡つてゐる。

ジョーは何んだか沈鬱で、物案じする顏色であるが、一方のエマは、清い、美しい室内着を着て、晴々しく幸福に充ちてゐる樣子である。

ハリス夫人と、妹娘のベスが遊びに來てゐる、エマはウキリヤムが、南米へ旅行する前、ジョーの月給を三百弗に增し、その上、前の半年期に遡つて、同樣の月給を支拂してくれたので、こんな豐な生活が出來る樣になり、今は幸福な身上であるといひ、競馬の雜誌を見せ、馬賭をしてる事など話す。

妹はキヨト〳〵室内を見廻はして『幸福ですわね』と羨ましさうに云ふ、ハリス夫人は何んだか懸念さうに、額に皺を寄せて、いろんな事を聞きほじくるので、ジョーは忌な顏をして、酷い返事許する。

來客のベルが鳴つて、やがてスミスが入つて來る、スミスはウキリヤムと共

に、電報に接して、突然南米の旅行先から歸つて來たのである、室内の樣子など見廻はして、俄かに立派になつたものだと、遠廻しの皮肉を云ひ、それから一時、衆を遠ざけ、實はジョーが會社の金一萬五千弗を盜用した事がスッカリ知れて了つたと云ふ、ジョーは落膽して顏色を失つてゐる。

處へウキリヤムが入つて來る、顏は一層眞黑く、日に燒けてゐる、何も知らぬエマはキャプテンの庇蔭で、增給されて、かかる豐な生活が出來るのを非常に感謝する、キャプテンは顏色にそれとは見せず、至つて無頓着な風を粧ひながら、言葉の端々に、ジョーの胸を刺通すやうな語氣が閃めく、ジョーはもう大きな聲では口を利得ないでゐる。

ウキリヤムはやがて歸ると云つて、スミスと握手する、ジョーは『自分とも握手してくれんか』と哀訴する、『よろしい』と云つて、ウキリヤムは堅く握手して、戸口まで出て立留まり『朝の八時迄に、事務處へ來てくれ』と云殘して

行く。

後でスミスは、事實をエマに知らせまいと思つて、いろ〳〵心配するが、ジョーは悶々して、埒らぬやうに『私は盜賊だ！明日は監獄へ行かねばならん』と叫び出す、スミスは輕く胡麻化してゐる、エマは氣が氣でなく、スミスに歸つてくれと云ひ、後で二人、さし向ひになつて『何うしてそんな事をなすつたのです？いづれ知れる事だと分つてるぢやアありませんか、成程ね、競馬に夢中になつてゐらしたのも合點が行きましたよ』

それから、エマがいろ〳〵詰るので、ジョーは自棄氣味になり、『汝は私を盜人と云つたね、此世界に一人丈は自分の味方になつてくれるだろうと思つてたその人が、私に背を向けた』と云ひ出す。

そんな事は決してないとエマはジョーを宥める、ジョーはしきりと愚痴を云ひ、エマに自分を助けてくれと哀訴し、最後に『ウキリヤムは汝を好いてるんだよ、あの男子の弱點は女だ、今夜も何んだか謎をかけて行つた……汝はこれから行つて、ウキリヤムに會つて來てくれたら、萬事穩便に濟んで了ふ』などいふ。

エマは不快な顏色をしてゐる、ジョーは猶も『私が金を盜んだのは、皆汝の爲だ……汝が盜ますやうにしたのだ』などゝまで云ひもして來る。

いろ〳〵忌な事を聞かされて、エマは最後に勃然として『これで貴方の賤しい心の底が始めて私によく見透かされました、私は是迄、何うして貴方を半分丈でも人間だと思つてたのでせう』といひ、自分が盜ませたのだと侮辱するなら、自分は、汝が自分に指一つ當てる事のならぬやうにする爲め、ウキリヤムの處へ行かう、これは愛の爲めにするのではない、汝の言葉で十分間前の愛は皆消ゑて了つた……『然し、如何なる方法で負債を拂ふか、その事に就いては一言も私に問ふてはならんといふ事は御承知ですか？』と詰となる。

ジョーは『決して問ひはせぬ』といふ、エマ『私一人のビジネスなんですよ』と言切つて、蹶然、戸を排して出て行く。

（第三場）　キャプテン、ウキリヤムの、バチエラー、アッパートメント、船舶用の救命浮袋など、壁上に飾り、帆綱や、楫や、凡て海の氣を帶んだものが室内の裝飾に用ゐてある、爐棚の上には帆前船の雛型が置いてあり、嚴丈造の椅子が、手硬い卓の傍に配置してある。

ウキリヤムが、シガーを燻らしてゐる處へ電話鈴が鳴る、相手はジョー夫人である『家に居てくれるか？』と聽かれ、最初は『否』と答へる、『ジョー夫人がお尋ねする』と聽いて、俄かに笑顔になつて『よろしい、ぢや待つてゐる』と云つて、少し思入れの顔色になる。

かくて、ウキリヤムは『セトー！』と云つて、日本人の侍童を呼び、上衣を着かへ、スリッパーを穿く手傳をさせる、この侍童セトーは無論米國俳優の扮

する處であるが、紐育在留の日本人の多數が、かゝる家内勞働にその生活を支えてゐるので、それが遂に米國劇場へ反射する事となつたのである、戰勝國民の沽券にシミが附いたやうな感がする。

ウキリヤムはかくて、卓上、紙を展べ、ノートを書く、ジョーの盜金を棒消にしてやるといふ文言である、待構へてゐると、ベルが鳴るので、エマが來たと思つて、急いで出迎へる、入つて來たのは支配人スミスである、スミスは『私が今一度伺つた時、エマが微笑せる顔で自分を見る事が出來なかつたら、自分は貴方を射殺します』と云つて、微笑しながら、ポケットから短銃を出して、見せつけて出て行く。

ウキリヤムは、後で、自分もポケットから、短銃を取り出し『己れだつて彼奴を射殺すよ』などと獨語いてる處へジョー夫人が入つて來る、ウキリヤムは、エマに椅子を勸め、いろんな話を仕向ける、エマは焦れて『ジョーが會社の金

を盗んだといふのは事實か？』としきりに問ふ、ウキリヤムは頷いて『如何にも事實だ』といひ、直ぐと又話を外らさせ、雛型の帆前船を取り出して來て、自分がこの船で、南太平洋を乘廻した昔話などする。

エマは、そんな事を落着いて聽いてゐる餘裕はない、ジョーが盗んだ金高の一萬五千弗といふ事を確め、『この事件を何んとか片附けて下さいませ』といふ、ウキリヤムは『貴方、金を持つて來ましたか？』と恍ける、エマは『否』といひ『私は名譽的に、ジョーを救つてやり度いのですが？』

ウキリヤム『名譽的とは何ういふ意味でせう？』エマは勃として起上り『貴婦人が、名譽的にといへばお分りでせう、貴方は發をたゝき廻つてる人です、私を然うしやうと思ひでしたら來て御覽なさい、直ぐと來て御覽なさい、私はもう歸るんですから』

ウキリヤムは椅子から飛上つて、仁王立に突立ち『汝が然う云へば云つて聞

かす、汝の卑劣な夫は、一萬六千弗の金の代りに、汝を賣ろうと思つてるんだ』

エマ『併し、私を市場へ出さうと思つたつて、私は出されるやうなものではありません、私は貴方も、ジョーも誰も恐れてはゐないです、サア、戸を錠下なさい、叫びも泣きもしないですから』凛乎として云放つて、自分で戸に錠を下ろし、鍵をウキリヤムの足の下に投げ出し、一歩進み出でゝ『貴方は從前、人を殺したでせう！、今、婦人を殺す第一の機會が來ました』

ウキリヤムはその意氣に感じ『……私は今まで愚うたらな婦人許り見て來てゐたが、汝のやうな男子らしい婦人を知る機會を得たのは大さう喜ばしい、その價として高くない』と云つて、前に誘惑の料にと思つて書いて置いた目錄をエマに渡す。

エマはそれを讀んで、感激して慄えてる處へ、スミスが入つて來て、エマの泣顏を見て『微笑してゐない、何うしたんだ』と例の短銃を取り出す、エマは

周章てゝそれを奪つて、目錄を見せる、スミスは微笑して『許してやつたか？』とウキリヤムに握手し、エマを家まで送り屆けに行く。

（第四場）第二場と同景、ジョーのアッパートメントである、ジョーはエマの歸宅を待兼ねて、悶々して室内を歩き廻つて、時間を聽合せたり、新聞紙を擴げて見たり、一向に落着かない、處へハリス夫人とベスとが尋ねて來て、エマの事を根問ひして、劍突を喰つて、歸つて行く。

程なく、エマは、スミスに送られて歸つて來た、スミスは直ぐと出て行く、ジョーは走り寄つて『何うしたか？』と眼顏で見守る、エマは默つて、彼の目錄をジョーに突附ける、ジョーは讀むより大喜び『これて助つた』と、吐息を吐く。

エマは安樂椅子の上へ腰を卸して、俯向き込んてゐる、ジョーは如何なる事があつたか、一切問はぬと約束しながら、矢つ張聞いて見度く、抑へ切れなく

なつて『汝が向へ行つた時に、キャプテンは家に居たか？』と、鋭い調子で問ひかける。

『ハイ……』と唯、言葉少なの返事である、ジョーはそれを緒に、何彼と問ひ出して『一體何ういふ風にして話を附けたんだ、汝は何んと云つたんだね』と熱心に聽く、エマはもう默つて返事をせぬ。

『何うしたんだ？』とジョーは荒つぽい調子になる、

『返事をしない譯は、私は云ふには及びません』と、エマは構ひ付けぬ、ジョーは『自分にはそれを知る權利がある』と極め付ける、エマは依然、何等の返事をしない。

一旦、悄げたジョーは、近寄つて『エマー！二人の仲ぢやアないか？、一體、ウキリヤムは汝に何と云つたか？』と問ふ、エマはキョトリとして、何んにも耳に入れぬ風で『何時か知ら？』と身慄する。

『何時だつて、時間なんか何うでも善い』と、ジョーは猶もうるさく問ふ、エマ『眞實に何時ですか、敎へて下さい』といふ、『今、十一時半だ、ウキリヤムの處では何うしたのだ？』と猶も聽く。

エマは疲れた樣子で起上つて『グット、バイ！、ジョー』といふ、『グッド、バイ！』とジョーは反響する如く云つて『一體、何處へ行くんだ？』エマ『お母さんの許へ行きます』ジョー『何うして行くんだ、此處が汝のホームぢアないか』エマ『私はグッド、バイを云ふのですよ』と聲も樣子も變つてゐる。

ジョーは驚いて、いろ〳〵宥めるが、エマはもう同棲するのは不可能の事だと云つて、戸外へ出て行かうとする、ジョーは追ひ縋つて『一寸と待つてくれ、何の說明もしないで出て行くといふ法はない』といふ、エマは、貴方にそれを聽く權利はないと、刎ねつけ『……私がその書類の爲めに拂つた價は、貴方のピジネスではありません、貴方は婦人の拂ひ得られる一番高い價を附けたので

す、何うしてそれを私が買つたか、拂つたかは貴方に關係のない事件です……今はもう私は貴方を憎みはしません、憐みます』

ジョーは、以後の事を誓つて、まだ宥めて見る併し『私の偶像は皆毀されて了ひました、グード、バイ』と告別してエマは戸口から出てゝ行く、ジョーは後を見送つてゐたが、激しく戸の鎖まる響がする、『自分は皆拂つて了つた』と歎息する。（カーテン）

エマはこれから、彼の親切なるスミスの妻となるといふ暗示が讀まれるのである、全體に、セトリカル、アートを善くマスターし得てゐる廉々が見えて、性格の配合も面白く、場面の取扱ひ方も巧みに出來、結構も緊縮されてゐる、唯、ジョーの性格のあまりに鄙劣で粗野で、殆んど一點の同情をも寄せ難いやうなものにしてあるのは、或批評家は、例の常套的の、ジャスチフアイスを用ゐてゐないとして、却て賞讃してゐるが、さればと云つて、エマのやうな婦人

と戀愛的關係が成立したものなら、其間に多少取得のある男子でなくてはならぬ筈である、鄙劣の性格を際立せるのは善いがこれては刺戟があまり强過ぎてゐる、スミスは最も人氣を引く儲け役で、エマはノラの妹分のやうな女、ウキリヤムといふ性格も面白い覘ひ方だ。

エマがノラの妹分といふ感のある如く、殊に最後の一齣などの中には『人形の家』の感化の痕が歴然としてゐる、それから今一つ、エマがウキリヤムの家に訪ねて行く邊りなどは、マーテルリンクの『モンナ、ヴンナ』を想起せしむる節がある、この二大戯曲家の作から暗示を受けてゐる事は爭はれぬ、而も此の作者の獨創も、篇中に認むべきものがあつて、兎に角、現代の亞米利加の物質文明の暗潮の中に喰喝してゐる人々の生活の、一面の活寫眞といふ事は或程度迄許さなくてはならぬものである。

この作者には他に『狼』といふ、作があつて、同時に、ニューヨルクの劇場に上さ

れ、これ又なか〳〵の人氣を博した、この作は加奈陀生活を材としたメロドラマで『全拂』に比しては甚だ見劣りがするが、劇的手腕は充分に窺はれる、その翌年『いと安き道』を出して、墮落せる女優に同情し、多大な反響を惹起した、兎に角、ウオルターにして『全拂』乃至『いと安き道』的傾向に、彼の才を發展せしめ得たら、將來の米國劇壇に、見るべき劇を貢献する作家の一人たるは疑ひ無い、余は寧ろケネデ キーよりも、この人の前途に嘱望する處が多い。

この他、ヘンリー、ミラーの手に依りて、千九百三年の劇壇に、大喝采を博せし作者ムーデキーの『大差別』は第一場に一無頼漢が、アリゾナの山中のキヤムプに、留守居せる一少女を掠奪し、第二場に、その掠奪婚の爲め、少女の不平不滿の生活を送るを叙し、第三場に、已に兄の家に歸れる少女を一旦夫なりし彼の無頼青年訪ね來り、告別する間際、自由意志により、舊緣更に新らし

き魂に醒めて新夫婦となるといふ筋、『海よりの夫人』の解決を學んでゐるものがある。

猶又、彼のナヂキモヴ夫人に依り、千九百七年の時季、ビジョー坐に上場せられたる『慧星』は、女優を主人公とせるイブセン式の劇、作者ジョン、オウエンは大のイブセン崇拜家である、戯曲としては失敗のものらしかつたが、ナヂキモヴ夫人の腕に依りて數週間打つゞける事を得た。

斯の如く『大差別』『彗星』等より、更に進んで『その家の僕』『全　抑』乃至『いと安き道』及びその後の新作に依て、米國劇壇に於ける新らしい劇の勢力は愈々一方に振張する傾向がある、一味、米國的色彩の附き纏ふてゐるのは、國民性の自らなる發露で、此の點に就ても寧ろ樂觀して差支ないかも知れぬ、要は唯、將來の作家等が例の常識道德觀に囚はるゝ無からん事を希望せざるを得ないのである。

獨逸座の寺子屋劇

大使館のK氏の許へ、獨逸座の支配人ルングといふ男が尋ねて來て、今度獨逸座で日本演劇『寺子屋』を上場したいから、誰かその方面に智識のある日本の一紳士を紹介して欲しいと頼んで行つたとの事なので、僕は友人を介し、そのルング君に逢つて、委細を聽くと、可成日本の風俗、人情に悖か無いやうに演じたいといふ考へらしい、始めは一週間程毎日來て見て貰ひたい希望らしかつたが、その話は有耶無耶に止んで、兎に角稽古を見る事にせうと、自分は指定の日に獨逸座を訪ふた。

この獨逸座は有名な小説家の、男爵ウオールツオーゲンが持主ださうて、伯林第一流の大劇場である、而も獨逸座といふ一つ名の下に、二つの劇場が戸口を列べてゐるので、一方の特別劇場の方で『寺子屋』を上場するのである、特

別劇場は至極手狹で、觀客席には三百人前後しか入れる事は出來ぬ、二階は正面に附けてある限り左右は板壁で劃してある、場代も至極高く、普通劇場の約三倍以上で、從つて客種も上等の者許りであるらしい。

自分はルング君に導かれて、觀客席に入つた、幕は上つて、狹い舞臺の景は日本の家屋になつてゐる、障子の目が至つて荒く、欄間は粗雜な格子で疊は緣無し、軒には青い眞菰で編んだ簾が垂れてゐる、その間から富士山が見える、富士山の恰好が頗る圓錐形的で、噴火後、間も無いと云つた風の描き形だ、それに一方の入口の戸の、杉戸が至つて大きく、重くるしい、前の席にゐた、矢張役員らしい男が『日本の家屋はこんなのか？』と聽くから『隨分御粗末過ぎる、日本の家は今少しく美術的に出來上つてゐる、併し獨逸の事だから、まア〳〵これ位で我慢しなくてはなるまい』と云ふ、處へルング君が戻つて來て『壁に懸物は要らぬか？』と問ふ、『イヤ、懸物を掛けると床の間といふ特別の設備が

無くてはならぬ』と說明する、『戸は大き過ぎてはゐないか？』と氣にしてゐる樣子、自分は『あまり重くるしい』といつたので、少々悄氣る、簾の事を聽くから『まア竹で編むのが本式だ、眞菰などは、めつたに用ゐない』と云つて明かせたものゝ、竹の簾などの注文は一寸と無理であらう。

一體何ういふ譯で、日本劇を上場するか？と自分は前の席に居る男子に疑問をかけて見た、『イヤ、好奇心といふ譯ではない、研究の爲めにやつてゐる』と答へる、この前希臘の古劇、アリストファーネス物などを上場してゐたのから考へて見ても、矢張一つは研究的態度を持してゐるのには相違ない、一體、この座に限らず、伯林の劇場には、古くはアッシリヤ邊の歷史物から、當世では英國のバーナード、ショウの物などは却て本國よりも喝采され、或は米國の人氣作家クライド、フキッチの物まで輸入され、露國のトルストイ物などもしきりに演ぜられてゐるのを見ても、研究心の盛んなる事は、英米の比でない事が推

知される、『寺子屋』の上場は、近頃日本に遊びに行つた獨逸の新聞記者が、日本劇を見て歸つたのが、その一動機となつてゐるらしい、尙『寺子屋』はフロレンツ氏の獨譯が嘗て出版されてゐる、幕は一度閉され、改めて開幕となる、自分は富士山の見える『寺子屋』などは怪しいものだと思ひ、それに最前から舞臺を往來してゐる日本服裝の女性が、千代にしてはあまり若過ぎるなど、注意を與へて居たが、愈々始まつて見れば、これは『寺子屋』では無い、『さみ子』劇である、小泉八雲子の『こゝろ』の中にあるものから取つたので、『寺子屋』は次の幕だといふ、自分は『さみ子』を讀んだ事がないので、これには少々面喰つた。

舞臺へは二人の女中が出る、壘の上に、頰杖ついて話し合つてゐる、一方の女中はそつくり日本婦人だが、今一方のは、着物の着樣が不恰好で、前がはだけて、膝頭が露出しさうである、それを氣にして、しきりと前をかき合せるが、

帶の處で引釣つてゐるので、何うしても旨く合はぬ、起つてからは一層可笑しく、手を張るやうな氣がした、やがて藝者さみ子が入つて來る、額つきの四角なのはチト目障りだが、兎に角、日本婦人と見られる、金糸の繡をした、藤色の縮緬の振袖を着て、黑つぽい帶を締めた樣子がいかにも日本風になれてゐる、欄干の處へ出て、富士山を眺めて、何か云ひ、やがて支那の樂器をいぢくつてゐる、處へ乃志太郎(?)が入つて來た、黑の羽織に靑つぽい甲斐絹か何かの、着流しである、何うも鼻が高くて、作つた眉が釣つて、よく見ても維新當時の浪人位にしか見えぬ、貴族の子とは受取り難い。

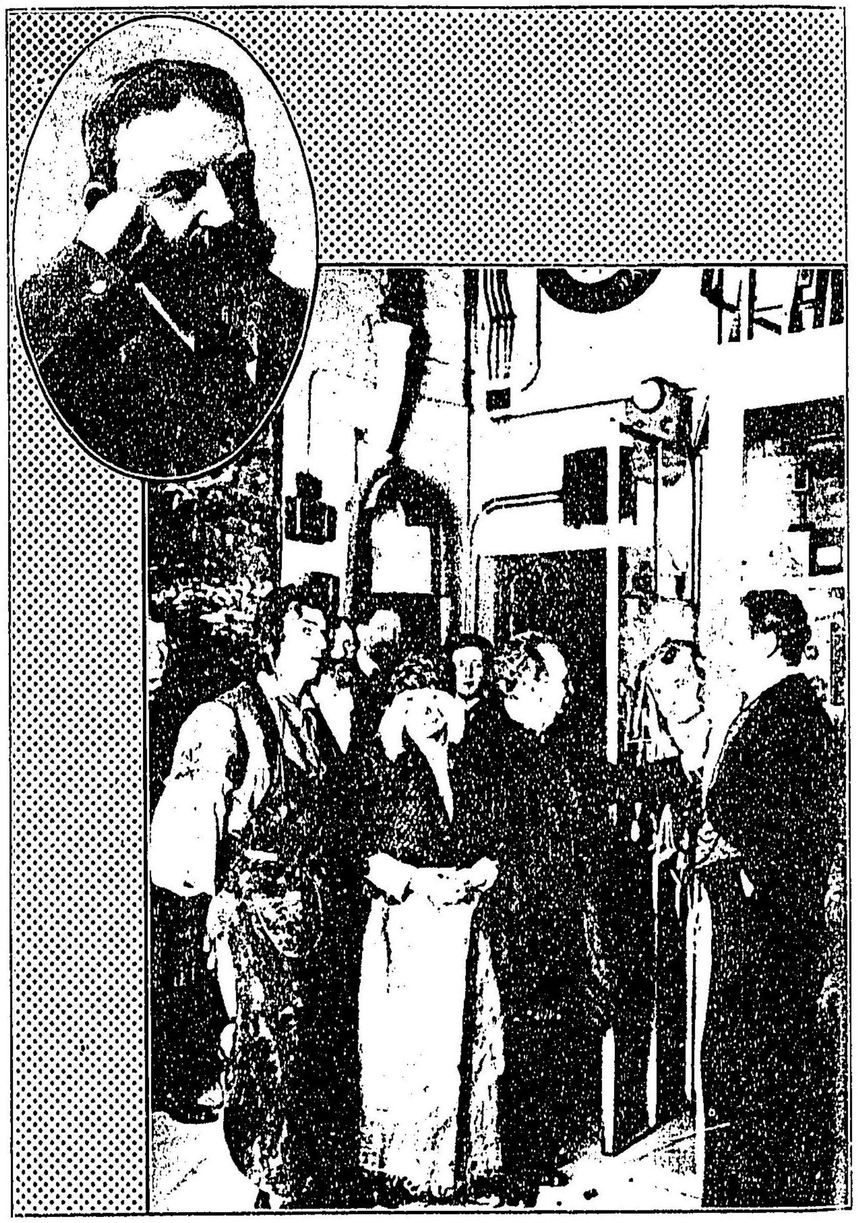
二人の情話が兎角立話になつて、何うも坐る事が少い、それに握手する癖が出て來るのも困る、やがて乃志太郎の老母が訪ねて來て、藝妓君子を說いて緣切談になる、この母が如何にも上品で、一寸東京の芝居を覗いてる樣な氣がした、君子は節義の爲に乃志太郎を斷念して入つて行く、それを後から呼び止め

で、『きみ子！』と乃志太郎が叫ぶので幕が下りる、『キミ子！』のアクセントが耳立つて、矢張飜譯芝居だといふ臭氣が鼻につくのも止むを得ぬ事だらう。

暫く休憩のため、廊下の方へ出てゐる、一人甲冑に身を堅めた男が刀のさし様に困つてゐるので、さしかへてやつて一寸と説明を加へる、二本の刀の用ひ口が始めて合點が行つた様子である、前幕のきみ子は、前より老けた千代の扮裝をして、そこらを散歩してゐる。

やがて再び入場する、幕が上る、花道が無いので、裏の方が入口である、大勢の子供が手習してゐる、中に、洋服を着た子の交つて居るのは、何うしたのか？と、自分は眉を顰めた、子供は皆色が白く、鼻筋が通つて、あまり奇麗過る、百姓の子とは受取れぬ、松王夫人が何うかしたと見えて、ルング君が子供の手を引いて入つて來る、千代も丁寧に膝を附いて會釋する。

やがてガヤ〳〵と大勢の聲がして、最前の、甲冑ン兵士等に取卷かれ、源藏



ンマトプウハの屋樂とウヨシ、ドーナーバ

が入つて來る、この源藏の着流しは不恰好で困つたものである、それに、鬚附きなどか何うもよくうつらぬ、先づ新十郎位の處に見える。

併し表情はさすがに、自然的で、千代が子供を庇ふ樣子など、全く一生懸命の趣が見える、義理だとか、武士の妻だとかいふ假拵虛飾的の處は無い、あるがまゝに人情の眞を打出してゐるので、型に嵌まつた、日本の『寺子屋』劇以外の妙味が無いでもない。

玄蕃は小具足に身を固めて出て來た、松王は、紫の鉢卷に、金箔摺りの長羽織、先づ本式である、大勢の百姓を警戒するのを、從卒共が唯、口先でやつてゐるので、ルング君が注意して、槍の尻で十字を交叉せしめた、そして子供を檢分する際玄蕃をして、扇で頤を支えしめたのも、ナカ〳〵日本通だ。

愈々首檢分の際、源藏が刀の柄に手をかけての身構、呼吸が嵐の如く聞えた、松王は、我子の首（箱の蔭になつてゐて外へは見えぬ）に對して、親たるの情

を惜氣もなく發露して、涙潸々たる趣があつた、これては玄蕃が氣取つて、大に疑問を抱くに相違無い、併し、自然的の藝風に熟してゐる當方の俳優がかゝる一大悲慘の場を演ずるには、矢張かくしなくては甘心する事が出來まいと思ふ、『寺子屋』劇としては、不都合かも知れぬが、活きた人間の、活きた動作を現はすには、かくしなくてはなるまいと感じた。

玄蕃去つて後、松王の自白、源藏の驚喜、一通りに出來たが、松王夫人が出て來なかつたので、何うも引立たなかつた、千代はもう戸の際に、横倒れになつて、正體無く始終歎き沈んである、日本の武士の妻なるものも、西洋の女俳優にかゝつては、全く顏色無しである。

臺詞は、床の下邊からしきりと云つて聞かせてゐる、隨分覺え難いであろうと思はれた、總體、日本の舊演劇の一種の型の中に、西洋の自然主義的の藝風を盛つたので、生々しい血肉が、錆び付いた鐵網の中から喰み出して、血汐が

ポタ〳〵と滴りさうなといふ風に見えた。

併し『寺子屋』劇は、あまり成功とも思はれぬ、寧ろ『きみ子』の方が齒障りなく呑み込めさうてある、自分は子供の洋服の事をルング君に尋ねて、まだ仕度が調はぬといふ返答を得て安心し、それから皆あまり起ち過ぎる事、刀のさし方の間違つてゐる事、源藏に『袴』を穿かせた方がよい事など、二三の注意を與へて、別れを告げた。

此劇の始めて、公演せらるゝ夜、恰もレッシング座でイブセンの『ジョン、ガブリエル、ボークマン』が上場せられたので、自分は、その方へ行つた、新聞の評で見ると、寺子屋劇中の『子の犧牲』をアブラハムが神の爲に其子ヤコブを捧げ、アガメンノンがその娘を犧牲に供へたのと比較し、此の宗教的の方のは、神がその子の犧牲を止めさせなかつたら甚しい不自然になるが『寺子屋』の方は、その間の兩親の煩悶苦惱がよく觀客に訴へられて、眞に悲劇的で

あると評し、『きみ子』に就ては、日本の藝妓は、西洋の娼妓とは異る事を說いて、一體に好評であつた。

獨逸座では、目下、隔日位に此の劇を上場し、大分人氣がある樣だ、書肆の店頭には『寺子屋』や『きみ子』が新しく賣出されてゐる。

序でながら日本古劇の、獨逸へ輸出されたのは結構であるが、日本の新劇が、西洋で演せられる丶時機が來なくては、日本は依然一箇『好戰的』のチョン髷國民として取扱はる丶に過ぎないであらう、『きみ子』劇を、今代物だとしてゐるのを見ても獨逸人は、日本の本國民は、まだチョン髷であると思つてゐるらしい。（四十一年十月）

ハウプトマンの新劇『グリセルダ』

かねて噂のあつた、ハウプトマンの新戯曲『グリセルダ』は三月六日、レッシング座に於て其第一回興行が行はれた、凡て新戯曲の第一回興行の夜は、觀客の喝采と批難とが、嵐と雨との如く激しく相戰ふのが常例なので、自分は是非切符を得やうと思つて奔走したが、遂早くもスペキユレーターの手て買占められてしまつて、遂に望を達し得ないで、二日目に觀物した。

この『グリセルダ』はデカメロン中の小話から材を取つたので、己に先人も幾度か筆を着けてゐる、ハウプトマンの『グリセルダ』の序幕は、一隅の田舍家の軒低く、洗濯物が干され、垣を見越して背景は耕された青い山で、樹木が黑く枝を張り、垣の中には果樹が一本、その横手に藥置小屋があつて、父は家

の前にて草苅鎌を研ぎ、母は戸口にて縫仕事をし、肥太つた、顔の小綺麗なグリセルダは、一方の小屋から藁を車に積んで、件の藁置小屋の方へ運ぶに忙しい樣子を見せて始まるのである、領主のウルフ伯爵といふは、粗野な、疎放な、常識外づれのした人間であるが、此處へさまよひ來て、グリセルダの體格の强健て、しかも眉目の美はしいのを見そめ、口說きかゝるとグリセルダは『彼方へ行け、この豚め』と云つたやうな粗い口調で、つんけんして寄せ附けず、果ては、力に任せて、伯爵を垣の外につき出して了ふ、伯爵は懲りずに、又入つて來る、此時、一度姿を隱したグリセルダの父母が家より出て來て、領主の顏を見るや、腰の拔けたやうにヘタ張つてお辭儀をする、ウルフ伯は、水を呑ませてくれといふ、父母は娘に命ずると、グリセルダは手桶に水を酌んで、持つて來たが、忽ちむつとして、いきなり伯爵の頭から浴びせかける、伯爵は怒つて、忽然グリセルダを抱き上げ、男力で家の中に連れて入る、グリセルダは叫ぶ、

それて幕となる。

以下略筋を語る、伯爵はグリセルダに對して、女子最大の恥辱を與へて復仇したのである、グリセルダは身重になる、併し伯爵はそれて甘心せず、彼女を容れて妻となし、一生の服從と、奉仕とを强ゐんとする、伯爵の伯父エベルハート伯夫妻は、ウルフ伯爵の獨身生活を諫め、結婚を勸める、ウルフ伯爵は、自分の領地の百姓の娘を妻にするといふ希望を語る、エベルハート伯夫妻も一度は驚くが、この人の氣象の枉げられぬ事を承知してゐるので、自分が引受けて周旋すると云ふ事になる。

それで、景は、又前のグリセルダの住家になる、グリセルダは庭中の果樹に梯子をかけて上り、果實を摘んでゐる、伯爵家の一族郎黨、手に槍を提げ、いかめしき扮裝で押寄せる、エベルハート伯夫妻も中に交り、ウルフ伯爵も來てゐる、皆が果樹の周圍を取圍む、グリセルダの父は、母を家の中に押入れ、戸

窓を鎖して覺悟の體でゐる、グリセルダが樹から下りると、一二の兵士が近寄つて來る、グリセルダは隠し持つたる短刀を閃かせて、寄らば切らんと擬勢する、皆恐れて後退する、ウルフ伯爵、つと近づいて、急に、その短刀を打落し、抱すくめて接吻する。

その次が結婚式の景となる、崇嚴なる希臘式の宮殿の階段を新郎新婦は下りて來る、グリセルダは盛裝して、ウルフ伯爵の腕に凭りかゝつてゐる、貴族等は、各々祝典の贈品を捧呈する、グリセルダはそんな寶石、貴金屬などは見た切りて捨てゝ了ふ、農夫等が草刈鎌を捧呈する、グリセルダは嬉しさうに見入つて、軈てそれで庭先の草を刈り始める、ウルフ伯爵は漸くグリセルダを止めて、接吻する、かくてグリセルダは、ウルフ伯爵の妻となつて從順と貞實を盡したが、伯爵は又非常にグリセルダを愛し、彼女の愛を他に奪はるゝ事を恐るゝあまり、産んだ子まで何處かへ遣つて了ひ、他人に面會さへ許さぬ、宮中に

二人の婢に侍れてゐるグリセルダは昔のまゝの、貧乏百姓の妻をした老父を引見する、老父は昔ながらの家土産を籠の中から取出して、婢の手を經て、グリセルダに獻上する、處へウルフ伯爵入來り、氣色を變へて、老父を追出して了ひ、直にグリセルダを抱く、グリセルダは『私の小兒は何うしましたか？』と聞く、最初に小兒の事を問はれて、伯爵は疑心解けず『私が汝の小兒だ』と抱附く。

併し、ウルフ伯爵の煩悶は愈々强くなる、畢竟妻の愛は小兒のために奪はれてゐるのだ、妻が自分に從順で、貞實を盡してゐるやうに思はれるのは、自分の小兒を産んだからだと、厭世觀の果てが、城を脱けて出る、グリセルダは、又それを諛解し、伯爵は自分が百姓出の娘であるといふ事を厭ひ出して、後悔、の果ての遁世であらう、伯爵は自分をオモチャにした、もうこんな處には一日も居ない、自分は返つて勞働すると云つて昔の百姓娘の服を着て、宮殿から

足の塵を拂ふて去る。

かくて景は三度、前のグリセルダ父母の住家となる、年老つた夫婦が娘の身上の噂などし、勞働の老人に苦痛である事など語り合つてゐる、忽然一方の小屋に物音がする、見ると昔のグリセルダは、娘時代のまゝの服裝で、手車に枯草を載せて運んで居る、老人夫婦吃驚して仔細を問ふ、處へエベルハート伯夫妻尋ね來り、連れ歸る樣にいふ、グリセルダ、うるさく思つて、エベルハート伯を垣の外につき出す、エベルハート夫人は失笑する。

最後の景はグリセルダが卑しき服裝して、他の婢僕と共に宮殿の階段の洒掃に來る、エベルハート伯はそれを見附けて話しかける、グリセルダは『自分は働くんだ』と云つて、一生懸命に、階段を拭いて見向きもせぬ、伯はしきりと舌を疲らせる、グリセルダは何處までも默つて働く、處へ一人の宮女、彼の隱したる小兒を抱いて來る、グリセルダは無意識的に、それを抱いて、階段の

上まで運ぶ、すると更に他の宮女、玄關口で受取つて、殿中に入る、グリセルダは忽ち悲痛の絶叫をする、ウルフ伯侍恰も歸り來つて、『グリセルダ！』と云ひ〳〵、相抱いて、接吻する、これで全曲が終つてゐる。

二日目の夜であつたが、觀客は、最後に大喝采を與へ、作者ハウプトマン氏をして三度、カーテンの外に立たしめた。

併し、觀客棚は少しは明きがあつて、この數日前のイブセンス、チルクの『吾等死より醒めたる時』の夜の稠密、一空席を餘さずといふ好景氣に比すれば一分方劣つてゐた、『死せるイブゼン、活けるハウプトマンを打した』とは余の綱かなる感想であつた。

一般の評は善くない、グリセルダの性格が、百姓娘時代と、宮中生活時代と、折つたやうに變化しゐるのは、第一不自然であるといふ批難が一つ、最後の幕の、目出度し〳〵が、何うも取つて附けたやうで頗る甘いといふ批難がその二、

すべてが、舞臺面の面白味といふ方面に傾いて、ステージ、エフエクト許り覘つた行方だ、恰も先日死去したウヰルデン、ヴルフの手法に似てゐるといふのが批難の第三、ウルフ伯爵は、ヒステリー患者のやうて一向同情を引かぬといふのが批難の第四、子が夫婦の愛を妨げるといふ問題を提出して、それに對して、何等の解決を與へぬのは慊らぬといふのが、批難の第五、引くるめて云へば、部分的にはハウプトマン的長所、美所、深所もあるが、全體としては失敗の作だといふに歸結する。

余は、以上に附加へて、この十景もある、舞臺面の變化折曲する舊形式が、この作をして、散漫弛緩ならしめた多大の原因であらうと思ふ、イブセン式の、最も緊縮した近代劇の觀客は、『グリセルダ』に依つて、再び沙翁、ゲーテの舊時代に逆戻する感を與へられるやうてある。

因にいふ、レッシング座は、イブセン、チルクスと共に、ハウプトマン、チル

クスを演ずる準備中てあるさうだ。

（四十二年四月）

註　ハウプトマン其後の新作悲喜劇『鼠』が今四十四年初春、伯林のレッシング座で發表された。

ズーダーマンの新小説『高調歌』

十一月の中旬に出たズーダーマンの新作小説『高調歌』は今や伯林至る處書肆の店頭に飾られて、新聞雜誌も此が批評紹介を力めてゐる、さすがに獨逸第一流の大家の、久し振りの新小説であるからナカ〳〵の人氣である。

篇中の女主人公が『……そして、私は知つてゐる、その幸福が唯、自分を待つてゐるのだ、それはもう其處に來てゐるのだ、見えてゐるのだ、太陽の光線の一つ〳〵の中に、微笑して自分を見てゐるのだ、全世界は幸福に充ちてゐる、全世界は唯もう音樂である、一つの高調歌、それが凡てであるのだ……凡てが一つの高調歌だ！』、汚れた書物の出入れに、一日越し働いてゐた貸本屋から出て來て早朝の霧の中に、大息を吐いての獨語が其題目を暗示してゐる、女主人公の名はリヽーである、隣家の息子と戀に落ちて、一度は駈落した事もある、彼女

は妙齡十七歳まで、薄遇と粗食とで虐められ通して來たのだ。

彼の父は一小市街の樂隊長であつたが、一日無言のまゝ妻と娘とを見捨てゝ、跡を晦まして了つた、その後は何の消息も絶えて聞こえなかつた、母は勞苦と心配とで狂氣した樣になつた、ゾッとする程美しい眼を持つて、スラリとした痩形のリヽーは女教師になろうといふ志願はあつたが、父の職業を繼いで、オラトリユームに立ち、樂譜をいぢろうといふやうな氣は微塵も無かつた、父の遺した『高調歌』は、貴重なる寶物として大切に保存せられた、この曲は彼の前途を豫告し、一生涯の危急存亡の機を示してゐるもので、即ち彼の女の運命の一卷である。

批評家ハインツ、トーボテ氏の批評を挿んで、以下を紹介する事にする。氏は曰く、清新な方面を掴み得て、殆んど青年の如く若返りした元氣で、エヤーアン、ズーダーマンは、彼の新小説を始めてゐる、ズーダーマンの小説は殆ん

と十五年間休息の後に出た、その休息の間には、彼は幾多の戯曲の著作に從事し、それ等の著作も亦それ〳〵世間の評價を贏ち得てゐる、彼の小說も亦、其戯曲と相並行するに足るものたる事を、世人は容易に認め得るであらう。

ズーダーマンは『當世流行の小說』を書かうと云ふ野心を持つてゐない、即殆んど年々、其處からも此處からも速成的の作が續出して、大熱心で賞讃やら喝采やら博するかと思ふと、數ケ月を出てざる中に、早く已に忘れ去られて、塵埃の中に埋めらるゝのが此種の小說の運命である。

吾人は彼が示さんとする吾人の現代生活の活畫に倦んでゐるものでは無い、唯此作に於ては、不安なる現代生活を一の枠中の畫として現はさんとした其苦心よりも、寧ろアートの方面により多くの興趣を感ずるのである。

此の作は一の、若々しい青春の人の物語である、彼女の病身な美術史の講師が嘗てかく云つて聞かせた、『よくお聞きなさい、可愛い小兒！、私は、貴方が

これから先の世に處して行く上に就いて、一つ善い忠告を與へて置き度いと思ふ、貴方は自分の心にあまり澤山の愛を持つてゐる、すべて愛に三種類ある、心情の愛と、精神の愛と、同情とである。人は無用の材木と枯れ果てゝ了ひたくないと思つたら、その一つ丈を持つ事にしなくてはならぬ、二つ持つてゐるのは危險である、三つ持つたら倒れて了ふ事になる、貴方は御自分の特別の愛に、一生懸命に氣を附けてお出なさい！』、リ、ー、エチエバンクは、この善き忠告に從ふて行く事が出來なかつた、彼は第一に心情を以て、隣家の息子を愛し、次て全き同情を以て、彼の講師を愛した、これはやがて進んで唯精神を以て愛するといふ運命となるべきものであつた。一人の青年中尉が一日、貸本屋の書棚の蔭でこの美人を見附けた、氣の輕い男子なのて、仲間中にその事を吹聽し廻つた、讀書熱は俄かに高まつた、カシノの中の爭論とまでなつたので、遂に大佐が一日その娘を見に來るに至つた、例のブレル中尉が、リ、ーにこん

な事を云つて聞かせた、あの老軍人は、お前を見に來て、斯ういふだろう、『こゝへお出て、小い娘！　私は白髮の、年老つた怪物だ、併し私はお前が欲しい、その時にお前には唯、斯ういふ勇氣があるか、貴方が御命令なさるなら何時でも閣下よ！、？、』と。

小いリゝーには、豫想以上の勇氣があつた、彼女は貸本屋を出て二ヶ月經たぬ中にメルツバフの大佐夫人となつた、この不權衡の結婚をする爲めに、大佐は其官職をさへ辭したのである。

讀者はこの老骨が、彼の少女の無邪氣なる生活を破壞し去るのを不愉快に感ずるであろう、放逸は彼女の潔白なる言行を荒らし、彼女は唯だ彼の特別なる慾情の犧牲となる。

リゝーは意氣地弱くも斯くなつてゐるのである、結婚の當夜『高調歌』の譜曲はカバンの中から何處かへ失せて了つた、大佐の情慾に燃えてゐる眼の前に

來て、リゝーは『貴方があの歌を私に返して下されば、貴方の思ひ通り私を何うなすつても否やは申しません』としきりに願つたり、訴へたりした。

かくて、彼の女はその言葉通りになつたのである。

老大佐は、美なる彼女と共に、榮えある新生涯を始めた、併し自分より若い者等の、多く目にかゝる處では不安でならぬと云ふので、常例の伊太利旅行は止めて、自分の所有地の、寂しいリシュニッチへ引張つて行つた、其處にはシューブエルトフエガーの老孃がゐる、リゝーは社交場裏へ出る前に孃の世話を受けて學校教育を經なければならぬ。

此處で彼れは、あの若い恥知らずのブレル中尉と、一層緣故が深くなるやうな事があらうとは思ひも寄らなかつた、彼れは當時別るゝに臨み『私は道德なんかに無頓着の人間だ、も一度貴方をキスしたい』と云つて、笑ひながら口を出したのである。

リヽーは狡猾なる連中の如く素知らぬ風をして上機嫌であつた、二人の關係は遂に露見して、リヽーは彼の夜、一の下女が彼の中尉をこの市街に連込んだ事まで物語つた、大佐は激怒して彼の中尉と決鬪せんとし、又リヽーを自己の所有地より犬の如く放逐し去つた。

この前編は全體に、引き締つて美はしく描かれ、各章が、幾多の岐路に入りながらも而も單純に纏められてある、如何にも生命あるものゝ如く、空想家の、バク魚的のリヽーが出てゐる、彼の稀有なる結婚に誘惑されて行くその煩悶は、客間に於けるその當日、早朝の色づける微醉など〻共に、自然畫の大作に於けるが如き美なる景色を以て描かれてゐる。

性格は指頭まで生命が罩つてゐる、老大佐は彼の慾望の爲に若い血が全身に通つてゐる、總てタルミなく、一つの引締つた小說が枠中の彩色畫の如き觀を呈してゐる。

少ブレルは大佐に腕を射擊されたが、亞米利加へ行く前に、一の無耻なる手紙を、今伯林に錫製造所を持つてゐる豫備の仲間の者に送り、彼女の事を托した、次の月、リヽーは彼の女の、最後の裝飾品を賣り盡し、貧窮に迫つて遂にリチヤード、デニックを訪問することに決心した。

始めは友人の花嫁を見に來たのだつたが、遂に工作場で其の假面が剝がるることになり、彼女は自己の運命のまゝ其處を立去つた。

彼の女の不道德なる夜生活が警官に襲はれた時に、彼女は全く地に落ちたやうに思つた、併し今一度、最後の挿話が正しくその『高調歌』の中に入つて來た。

即ち彼の女の運命の上に、更に一度、軟かなる思慕の花が咲いた、そは、發情の年紀に自ら發する一の眞の愛、一の歌で、相手は靑年美術學生である、彼れは今まで見た多くの婦人の中で、此程美しく、又潔白なものはないと思つてゐる。

かくて彼れは自ら詐僞の彩色的世界を作り出した、彼は『幾多の男子に蹂躙された彼の女の貞節はその打慄へる精神の上に、新たに惠れたる覆衣を被ふたのである』併しその覆衣は、忽ち彼の女自ら引裂かねばならなかつた、而も彼れの愛はより强かつた、共に逃れて夫婦たらんとして、彼の富める叔父の援助を求むることゝした、その叔父は一奇人である。

三人共にリンデンの一料理店に上る、すると昔の空氣の匂ひがなつかしくなつて、リヽーは思はず、飲んだり、古い歌をくりかへしたりする、頗る上機嫌になつて、遂にはタンッをやり始め、オテロやトートヤダの狂詩を昔し通りに歌つたり、踊つたりした。

他の朝、叔父が連れて來て、遊び戯れ、此れから長の旅へ出ようといふ、彼の女はその意味を了解した。

今は彼の女に向つて唯一の殘つてゐるものは死である、『高調歌』の譜曲を手

にして、スプレー橋の上に立つた、『高調歌』の曲は、彼の女の運命をかく歌つてゐる――、併し夜の闇黑なる水光を見ると、急に死ぬ勇氣は挫けて了つた、譜曲丈けを水中に投じ去つた。

その翌春、彼の錫製造所の主人の處を再び便つて行き、リヽートは遂にデニック夫人として南伊太利へ旅行することゝなつた。

それから先が大にある筈であるが、ズーダーマンは談話を茲で切てゐる、從つてリヽーは性格がない、彼の女は意志が定まらぬが爲め、いろんな人の手中に落ち、次第に墮落し去つた、彼の女は常に自らを他人に取らしめて、曾て自ら與へなかつた、女主人公に對して、篇中の男子は大佐の生々した怒りポさから、理想的のコンラッド、レンシュミッドの煩悶まで、それ〳〵に、鋭く出てゐる。

ズーダーマンは僅少の努力を以て吾人が日常目視する人間を生々と描き出し

た、彼は僅少の努力で而も意味深く、老年の狡猾なる叔父の村長に、驚喜すべき造形術を施してゐる。

表現法に於ては善き言詞と適宜なる觀察と、吾人の想像に印象する、愛の描寫のチャームで、均衡を保てる位置の嚴密に緊縮せる、相互の會話の滑らかに適合してゐる點など最も見るべく、殊に貧困の强烈な、描寫の部分は、此の小說中の最良の一章で、頗る藝術的である。

無論欠點は方々にあるが、兎に角、少くとも一ケ年間は眞摯に、勞作したものである事を認めねばならぬ。

要するに正直なる、尊敬すべき作で、人類の弱點、缺點はよく全篇に現はれてゐる、彼の愛讀者の必ず見るべきものであらう。

（四十二年一月）

註　ズーダーマンにはその後、新作劇「流の兒」がある、昨四十三年中に發表された。

最近のストリンドベルヒ

イブセン以外のイブセンと稱せられて、歐洲文壇に北光の如く輝いてゐるストリンドベルヒの最近の消息が、ストックホルムから傳へられて來た、今、其一班を紹介する、

ストリンドベルヒはこの六年間、ストックホルムの北郊の森に黑んだ丘陵や、廣々とした練兵場が見晴らされ、夜は北地の深沈な星の空の正面に仰がるゝ好勝の地に手狹い、小奇麗な住宅を建てゝ例の寡居生活を送つて來たが、昨年の夏、突然此處を引拂つて、ストックホルムの日本橋ともいふべきドロットニングガーテンの高等下宿屋に、三室程の奇麗な部屋借りをする事となつた、尤も此の邊は人車喧騷の中心點を外づれて、高い丘のやうになつて居り、例のストリンドベルヒの仇敵たる大學が附近にある、

此の轉居は、外觀上、ストリンドベルヒの生活に、別に特殊の意義を與へて居らぬやうであるが、而も轉居後の著作は、慥に其精神上に、一新光明の示現せるを認むべきものがある、一體、ストリンドベルヒは、暫く其影を國民の眼前から晦まして了ふかと思ふと、再び現れて來た時には、必ず貴重なる寶を土産に持つて返る、國民は、ヒマラ探險や、北極遠征に出かけて、還つて來る普通の冒險家連に對しては、大歡迎大喝采を惜まぬ癖に、ストリンドベルヒが、精神的探險の長途から凱旋し來つた時には、却て、嘲笑や罵詈を以て此に酬ゐるのが常例のやうになつてゐる、

ストリンドベルヒは近時「第三の青卷」を公にしたが、瑞典の國民は此を沈默の中に葬つて了つた、而も公衆は此の書に依て深い感興を起した事は疑ひを容れぬ事實なのである、殊に其第一卷は最も傑れてゐる、凡て千三百頁の內容を有し、天地間のあらゆる重要なる問題に强く、且つ確實に觸れてゐるものである、

ストリンドベルヒは、この書を著して後、暫く元の寂寞なる生活に立歸り、唯インテヰメン座の管理者として劇に關するパンフレットを公にしたのみである、彼は以後著作はせぬと決心した、知人は彼に向ひ、特別劇のダズン許りの材料を已に準備して置ながら、何故に著作せぬかと聽くと、「自分は氣が向かぬから今は劇は書かぬ」との答である、

併し、彼は背き得られぬ契約のある事を憶出した、それは彼が第三回目の結婚に依て產れた娘のアンナ、マリーといふ女優に當て、メールヘンスピール お伽劇を書くといふ誓をしてた事である、で、彼は一日——恐く其生涯の最も幸福な一日であつたらう——卓に倚りかゝつて、例の美しい、堅い文體で、一篇を書卸した、題は「アブ、ガゼムの上靴」、少年兒童のためのお伽劇で、ブランク、サアースの、五齣物である、

この劇は佛蘭西の傳說及び千一夜物語から材料を得てゐる、ブランク、ヴアースは沙翁の體を學んだと、作者自ら言つてゐる、この劇に於て、從來、不幸惡運の犧牲となり、激しい精神的苦鬪の生涯をのみ辿つて來た作者は、始めて一の安慰的の吐息をしたやうに見える、此れがストリンドベルヒ生涯の一轉機であるか否かは、猶甚しい疑問の中に在ると云はねばならぬが、兎に角一異色たる事は爭はれぬ、而して、「青卷」の中に在るヒムンに於て、彼は過去の苦鬪的生涯を彼の先聲者たるイマヌエル、スウヰンデンベルヒ的思想を以て痛切に歌ひ謳してゐるが、此のお伽劇には、親切、聰明、小兒的の悅樂といふやうな調子が珍しく響き渡つて、薔薇色の人生が描かれてゐる、生血の色のては無い、素より篇中に爭鬪はあるが、信切や眞の戀愛が最後の勝利者たる事を示すものである、

貧乏な香水賣のアブ、カゼムの、無邪氣な上靴が、いろんな輕蔑を受ける種

となる、それに猶二つ、重なるモーチーヴがある、ユリー公子が、アブ、カゼムの娘ッユーライカに對し不幸の戀愛をしてゐる、然るに娘ッユーライカは、女が欺かれて、結婚して、棄て去らるゝのを見て、自分はかゝる運命の下に立つ事を欲しないで、誰とも結婚せぬと決心する、

公子は不幸にして、この娘を見て、戀愛のために囚はれたが、而も、娘の愛を得る望のない事を見て喪心の體に陷る、娘の叔母のアムや、靴師のハッサンが交るゝ來て娘の氣を變へさせやうとする、最後の幕は最も有力な方法を以て取扱はれてゐる、瀕死の公子が、ッユーライカの戶口へ運ばれて來る、ッユーライカはそれと瞳を見合はすと同時に、心が躍つて、結婚を承諾するといふので了る、

各シーンが强く、爽快な感を與へ、チグリス河岸の風景畫や、椰子樹の森や、東洋的の宮殿や、美なる裝飾及び莊重なるデコレーションが、相俟つてこの劇

に新なる色彩を加へ、殊に宮殿のシーンは音樂の伴奏を用ひ、すべてがオペラのテキストがゝりに出來てゐる、

このお伽噺について、ストリンドベルは大仕掛の史劇を新作した、而かも僅に三週間で出來上つたのである、

題は「最後の騎士」で、一の大なる悲歌である、高尚な、正義的の人間が、惡人を、常に至善の人と思ふてゐる爲に、最後には孤獨の境遇に陷り、淪落に赴くの徑路を示してある、當時瑞典の柱石たるべき人々が皆、私欲自利のために迷はされて、國家も人民も忘れて了ひ、第一流の野武士的騎士をして、この重任に當らしむる事となる、

「最後の騎士」は、貴族の、ステン、スチユアーて、賢明な、思慮深い、國の擁護者てある、彼は羅馬法王より贈られたる瑞典王の玉冠を拒斥し去つた、而も彼の畢生の企圖は、遍く瑞典の貴族が一致團結して、恐るべき强敵たるデンマ

ークのクリスチアン二世、後に、壓世王クリスチアンと稱せられたる暴虐の君主に對抗せんとする事てある、

ステン、スチユアーと相反目してゐる敵手に、第一、僧正グスタフ、トロールといふ、狡猾な、放縱な人間がゐる、最初放蕩勉强のため、羅馬のバチカンへ行つてゐる、スチユアーはそれを故國に呼還し、第一僧正に任命する、此に依て、彼及び彼の一族の者と和睦せん事を望んだのである、併しトロールは、和睦する氣は無い、歸國の途次、敵國の王に內通の約束をする、かくてアブサラ寺院の聖堂で、スチユアーと二人の會見となる、最も注目すべき立派なシーンてあるが、而も此時トロールは遂にその假面を剝落する、

この劇の第三の主なる性格は快活な、豪膽な青年グスタフ、エリクソンてある、後には大騎士となつて、名聲赫々たるワサ家の祖先たる人物である、このグスタフ、ワサは、スチユアーの、第一の股肱で天稟の決斷力と先見ある頭腦

とを以て善く計り、善く行ひ、國家の擁護者となつてゐる。ストリンドベルヒは、この三性格を歴史的傳說の中より取つて、而もあまり傳說を打毀はさぬ程度に描寫を試みたので、一般公衆の多大なる感興を惹くに餘りあるものである、

猶、この劇の女主人公といふべきは、マルタ、タディレと稱するデンマーク生れの、スチユアーの母である、ストリンドヘルヒは半ば巫女的、魔女的に、この婦人を描いてゐる、一シーンに於て、この婦人は、眼に見えぬ人と語り、僅少の語句の中に、瑞典の未來の大擾亂を豫言してゐる、その上、獨白的に『人間は、自らすまいと思つても、惡事をしなければならぬやうに出來てゐる、自分の良心に逆つて惡事をしなければならぬのだから自分で自分が憎くなるが、而も、行つた後で、悔みはせぬ、――自分は、太陽のやうな明るい頭髮の、青い眼をした、天使のやうな小兒を貰つた、自分の實子よりも可愛く思ふ、この子には、自分の善事以外、何事をも語つて聞かせぬ、この子は、ステン、スチ

ユアーである、憎惡と復仇の花嫁たる自分は、この子にのみは愛や赦罪を最善のものとして常に敎へ込んでゐる、自分に出來ぬ事を、この子には是非せよといふのである、併し、私の運命はこの子をして矢張惡を行ふべく餘儀なくせしむるであろう、私は全く罪せらるべきである、それは自分がデンマーク人であるといふ事を思ひ切れぬからである、如何いふ譯か知らぬが、暗黑なる運命の力がそれを自分に與へて居る』と

更に、この女豫言者は未來に關して『自分はデンマークのクリスチャン王が絞首の刑臺を持運んで來た夢を見た、互に鬩ぎ合つて居た國民の、最終の審判日が遂に來るのである』といふ、

かくて、ステン、スチユアーは、グスタフ、ワサを送りて、トロールの城を攻圍せしむる、トロールは逃亡せんとして、遂にスチユアーの兵士のために捕へられる。城前の森林のシーンで、スチユアーには、一種の蠱惑的の信切心が起

る、これは彼の血管の中の、デンマーク的の魔女の所爲である、

青年グスタフは、トロールを縊殺するか、溺殺するかせよと迫る、而もスチュアーは、遂にトロールを赦し『余は君に君の生命を贈物とする、余の好意を察したら、君は復仇を企やうとは思ふまい』と告げる、グスタフ、ワサは切齒して口惜がり『今に、貴方は後悔する、自分はこの場で水中に入るか、火に飛び込むかしたい！』と絶叫する、

トロールは暫時の間に、ウエステラス城の牢獄を脱し、デンマーク王の處に走り、王を促して、ステン、スチュアーを征服の謀を企つる、最後のアクトに於て、クリスチヤナ王は軍艦を率ゐてストックホルムに押寄せる、グスタフ、ワサは迎撃つて此を破る、軍艦の上には騷動が起つて、人々は食糧もなくなる、クリスチヤナ王は景勢を挽回せんとし、反間の計を以て、スチュアーを誘ひ出さんとし、その身代りにグスタフ、ワサ等が囚となる、王はこの人質を連

れて、ストックホルム城に押寄せる。

最後の幕は、ストックホルム城のシーンで、ステン、スチュアーは屍體となつて横はつてゐる、次の室には、スチュアーの未亡人クリチナヤ、扈從の人々などがゐる、クリスチアン王は、瑞典の貴族や人民が彼に味方せるを知り、トロールと共に、ストックホルムを攻圍み、城の鍵は詐謀に由て忽ちデンマーク人の手に渡される、かくて城中の貴族や僧正等は捕へられて、大虐殺が行はれ、血池地獄を現出する、數百年間、瑞典人がデンマーク人を憎惡するの念、骨髓に徹してゐる原因は此の虐殺からである、

瑞典の暗黑なる未來に、唯一點、希望の光となつてゐるものは、彼の、グスタフ、ワサが牢舍を逃れて、故國に歸り、更に、再擧を企つるの條である、

ストリンドベルヒは『國の擁護者』と題し、グスタフ、ワサの史劇を新作せんとしてゐる、この劇はまだ現れぬが、作者自らは『最後の騎士』よりも更

にノ仕掛けで、有力なものであると云つてゐる、

ストリンドベルヒは本年一月廿二日を以て滿六十歳の誕生日を迎へた、國民は彼に對して、如何なる感謝の意を表したか知れぬが、彼が、文學的生涯の、常に人類の指導者たり、豫言者たる任務を以て飾られつゝあつた事は何人も之を疑ふ事を得ぬ、又今後と雖も然かあるべき事を豫期すべきである、ノーベル賞金の特典は未だ彼に與へられぬが、彼の如き適當の候補者は、他にその匹敵無き事をも亦証認せなければならぬ、

（四十二年三月）

獨佛劇壇近事

（その一）　伯林劇界

フロイセンには、數ヶ所の國立及王立劇場が建立されてゐて、國家及び王室の直轄に屬してゐる、王立のものには伯林に三ヶ處ある、王室よりは年々八十萬マーク以上の保護金が支出されてゐる、カイザーの所望に由て、新作せられたる『サンダナポール』は、この劇場の一たるオペラハウスで上演せられつつある、このオペラはアッシリア時代の風俗、時裝をそのまゝ舞臺上に活現せしめて、頗る莊嚴華麗を極めてゐるので、非常の費用がかゝつてゐると云ふ事だが、批評家受は至つて善く無い、皆『眠くなる』と云つてゐる、今一つの、王立劇場（キニウロッヘンシヨースピールハウス）の方では、獨逸のクラシックの一となつた、グスタフ、フライタフの『ジョーナリステン』や今回死去したエルンスト、ウォルデンブルフ

の名を成した史劇『死刑場の婦人』や、その他、沙翁物、シラー物などが主として上場されてゐたが、昨今、英國の新作家マグハムの喜劇『ドット夫人』が沸ぜられつゝある、この作は輕い、柔やかな、滑稽に絡んだ戀愛物で、昨年の夏、ロンドンのコメデヰー座で、エレン、テリーの後繼者を以て目すべき名優マリー、テンペスト嬢が非常の喝采を博してゐたものである、この作が、クラシックの寶藏のやうな王立劇場に輸入されたのは、一寸と異樣の觀がある。

何と云つても、近代劇、思想劇の淵叢を以て目すべき地は獨逸であるが、その獨逸の清新なる劇壇に、常に覇者たるの地歩を占めてゐるものは實にレッシング座である、ハウプトマンの『日出前』を上場して獨逸の劇場史に一新紀元を劃したとが、長く忘却すべからざるものであると同時に、現今に於てもイブセン劇の本場としては、蓋し那威のクリスチヤナ以外、世界唯一と稱して不可なしと信ずる、昨年來、此座ではハウプトマンの『織匠』や、『狸の裘』ミカエ

ル、クランマー『沈鐘』、トルストイの『暗黑の力』及びイブセンの諸作を、少し俗受け氣味の『ローゼン、モンタク』と題する心中物に糾ひ交せて、續々上場し來りつゝあつたが、本年正月より、イブセンス循環興行を始め『青年同盟』より、史的順序を追うて『死より醒めたる時』まで、十三の社會劇を興行し、百回に達するまで繰返す筈になつてゐる、最近上演せられた『社會の柱』を見物に行つた夜など、八九分の入りて、上景氣を呈してゐた、さすがにイブセン劇の觀賞者の多いのを見ても獨逸の國民性の一斑が察せられる、兎に角、これ位高級の觀劇者を得れば人意を强うするに足るものがある。

名優アルバード、バーサーマンは此の座の人氣を兩肩に背負つて立つてゐる、今の『社會の柱』では、參事官ベネリックに扮した、一體辛味のある、とげ〳〵した藝風で、觀客は眉間の上に刃物でも擬せられたやうに、一種苦痛ではあるが、而も忘れる事のならぬ印象を受けなくては止まぬ、イブセン劇の

主人公には最も適役である、猶、以上十三の社會劇の外『ブランド』や『ピャーギンド』『戀の喜劇』等も追々上演せらるゝ筈である、場代も通し切符を買へば格安で、三十マーク乃至五十マーク位て一循環季間、可なりの場所を占領せられる事になつてゐる、一シーズン、伯林に居ればイプセン劇を一通り卒業し得る譯である。

レッシング座と相對等する地位にあるものは、獨逸座である、これには特別劇場と普通劇場と二つ列でゐる、この事は以前通信した事があるが、前者には つい近頃伊太利の大女優として、サラ、ベルナード以上と評せらるゝデューゼが來て、例の病的のダンヌンチオが、この病的の大女優をモデルとして書いたといふ彫刻家の戀い悲劇『ラ、ギオコンダ』を始め、イプセンの『カブリエル、ボークマン』などを演じ、人氣を吸收してゐた、最も全體で三百人しか容られぬ小劇場の事であるから、平常、五マークの、最廉價の入場券が三倍以上に上

「沈鐘」のマートとハウプトマンの「道徳」

騰したといふ位の事である。

此頃は、バーナード、ショウの『醫者のヂレンマ』や、ホフマンスタールの『エレクトラ』などが交代に演ぜられる、昨年の後半には、枯草小屋で、青年男女が肉交を始めるといふ、思ひ切つた場を見せるので有名な、ウエデキンドの『春情發動』や、又イブセン物では『幽靈』ジョン、ガブリエル、ボークマン』などがあつた、すべて、ひねくれた作を選んで演じてゐる、『春情發動』に對しては、以前、大分批難攻擊があつた樣子であるが、所謂『特別劇場』で、演ずる者も、見る者も共に研究的態度なのであるから、一般の俗衆相手とは、多少事情を異にするものがある、彼是故障を云ふべき筋のものではないといふ理由の下に、官憲の束縛の手も屆かない事になつた、文藝自由の範圍はこの程度まで確認を經なくてはならぬ、此も要するに、當局者が法律の運用を始むるに際し、先づ文藝界のオーソリチーの意見を徵するといふ制度が存立してゐる

からてある、大學生と女學生とを主人公に用ゐた劇は興行を許さぬといふやうな、制裁を設けたりなどする姑息主義を先づ打破してかゝらねば、少し尖つた新社會劇を日本劇壇に樹立せしむる事は、到底覺束なからう。

獨逸座の普通劇場の方では、沙翁物の『リア王』『眞夏の夜の夢』『マクベス』『ハムレット』、それからグリルパルゼルや、ヘベルや、シラーやなどが主として演ぜられる、露西亞物なども折々出るが、概して當世といふよりか、寧ろクラシックの方に傾いてゐる、何しろ特別劇場と相俟つて、伯林劇界の一方に覇視するものてある。

地位は少し落ちるが、クライネス座は、ウンテル、デン、リンデン街の樞要の地を占め、ベルリン大學にも近く、旁々、常に異彩ある新劇を上演して獨歩の觀をなしてゐる、昨年は夏の間も休まないで演じ通してゐた、その頃から彼のデンマークのショウといふ評のある、グスタフ、ヴキードの『2×2=5』と題

する諷刺劇を出し、二百回許りも打續けてゐたが、昨今は更にルーデキヒ、テーマの『道德』を演じ、彼此、四五十回に及でゐる、『2×2=5』の方は人氣更に衰へず、此頃では毎日曜の午後興行に廻してある、パロデキー座といふ小劇場では、これをもぢつて一時『2×3=7』といふ滑稽物を出して、客を呼んでゐたのを見ても、その人氣の一般が推知される。

クライネス座と略々、相匹敵するものは、ヘッベル座である、此は、建築も最も新らしく、從つて凡てが最新式に出來てゐる、觀客席の壁は寄木細工式の至つて洒いもので、金ピカの氣は微塵もない、一體獨逸劇場の凡てが、彫刻物などの裝飾はあつても、英米流の、金碧燦爛人目を眩するといふやうな俗氣が無い、質素で、上品で、クラシカルで、何んとなく希臘の古劇場の傳統をそのまゝ引き來つてゐるやうに思はれる、その中でも、このヘッベル座が最近獨逸人の趣味を最も高調して代表し得てゐるものであろう。

この座では、昨年から、ショウの『ウオーレン夫人の職業』が大當りで、彼是二百回迄演じつゞけ、引つゞいて同作家の『戀をあざる人』出て、此も亦、百回許に及び、次で、ヴキードの最近の作『トンメルムセン』が相當の人氣を博した、昨今は、ソフエ、ミカエルの『革命的結婚』が上演されつゝある、この間に挿んで、ストリンドベルヒの一幕物『死前』『强者』なども演ぜられた、昨冬はサラベルナードが客優として招聘され、サルドー物など出して、大人氣を得た、それから俳優學校の試演が折々の午後興行にある、恰も紐育の劇術アカデミーの試演が帝國座であるのと、好對照をなしてゐる。

ヘッベル座より、數町を距てゝ、ベルリンナー座がある、此れは最も古い劇場で、一時は第一流の地位を誇つてゐたが、今はレッシング座や、獨逸座のために頭を押へられ、新進氣鋭のヘッベル座邊りからも客を喰はれて了つて、意氣銷沈の體である、出し物はヘッベルの『ヘロデ、ウンド、マリアンネ』など

が近頃では先づ注意を引いたもので、グリルパルゼルや、マーテルリングなども折々演ぜられる。

ベルリンナー座程度のものには、新劇場がある、注目すべきものとしては『ジユリアス、シーザー』だの、『ファウスト』だのが上演せられた、目下はウキンの名優、ヨセフ、カインツを招聘し、『ハムレット』『ファウスト』及びエチガレー物の主人公に扮せしめて、一部の人氣を動亂せしめてゐる、ヨセフ、カインツは、メタリックの聲調と、餘裕のある藝風を以て特色とする。

今一つ、建築が氣が利いて、新式に出來てゐるのと、場代が頗る廉で一等席が二マーク内外、專ら平民的娯樂を供給するといふ主旨に成、慥に一特色を有してゐるのは、シヲー座である、同一座名の下に二劇場あるが、シャーロッテンのが今いふ新らしい方である、興行物は、『ジユリアス、シーザー』のやうなクラシカルなものも、ショウの『惡魔の徒弟』や、イブセンの『社會の敵』のや

うな當世なものも、ずつと碎けた俗受物も交る〳〵出る、トルストイの誕生日には『闇黑の勢力』を演じ、今回死んだ戯曲家ウキルデンブルフのためには、ウキルデンブルフ夜を催すとか、頗る力めてゐると云はなくてはならぬ。

この他、二流、三流以下の劇場を合せて、約四十前後ある、最も留意すべき事は引つゞき獨逸作家の新作が少くて、外國の輸入劇がその勢力を逞うしてゐる現象である、その中でも、デンマークのヴキードと、英國のショウが最も多く人氣の中心となつてゐる、以上記載せるもの丶中に見る外、ショウの『武器と人』とは『勇膽なる軍人』と改題して、ストラウスの作曲で、コミック、オペラになり、ウエステン座に於て已に四十回許りも打ち續けられてある、ハウプトマンの新劇『グリセルダ』が出るといふが、あまり多く期待はされぬ、新天才、新戯曲家の出現を憧憬する聲の高いのは日本許りではない、實に獨逸劇壇の現狀である。

オペラの方では、例のカイザー御好みの『サンダナ、ボール』の演ぜられつゝある王立のオペラハウスと、新王立オペラハウスがある、『サンダナ、ボール』以外ワグナー物や、『マダム、バターフライ』や『サロメ』や、その他、普通の出し物が走馬燈的に演ぜられてゐる、『コミッシエ、オペラ』座では、マーテルリンクの『ペリアス、ウンド、メリサンデ』を始め、『ザヾ』などを演じてゐる、一昨年から、昨年にかけて、非常の大喝采を歐米劇壇に博し、この一作で作者フランツ、レアリーは七十萬圓の收入があつたといふ、劇壇歴史のレコード破りとして有名なるコミック、オペラ『愉快な後家』即ち『ルステキグ、ウイドウ』や、此と略ぼ同等の勢力のあつた『ワルツの夢』なども彼方、此方の劇場に殆んど絶えず演ぜられ、『ダラー公子』も亦、頗る人氣がある。

以上の理由で、獨逸の作家乃至、獨逸國民の立場から云つたら、伯林昨今の劇壇は、國民的特色を欠くといふ點に於いて、悲觀すべきものがあるが、併し、

近代劇の研究者として、あらゆる國の。代表的諸作家の代表的戯曲を觀得ると、いふ便宜上よりいへば、英、米、佛のメトロポールは、遂にこの獨逸のメトロポールに企及し得ないと斷言して大過無きものである。

（その二）

戯曲家、ウヰルデンブルフ

今回死去した獨逸戯曲家、ウヰルデンブルフのために大宰相ビューロー公は自ら一論文を『新評論』誌上に公にして、最も眞摯熱誠の態度を以て其文勳を追讃してゐる、日本の大宰相の文士招待とは、其事跡稍相似て、而も其精神は頗る相懸隔してゐるものがある、ビューロー公は一體、文藻のある人て、宰相を罷めて、新聞記者になりたいといふやうな意向を洩した時に、英國の某新聞社から數萬マークの俸給で、招聘を申込んだといふ噂もある位であるから、唯政治上の駈引以外、趣味も思想も有して居らぬ專門政治屋とは品彙を別にしてゐるのであらう、日本政府でも對文學者問題の彼此れ議せられて居る折柄、

桂、首相や、小松原文相などが、こういふ人の論文を讀んで置いたら多少參考になるかも知れぬ。

エルンスト、ホン、ウヰルデンブルフは一千八百四十五年に產れ、本年の一月十六日六十四才を以て不意に病沒した、彼は其先祖より普魯西亞の王宮たるホーヘンツオレル家の血統を引てゐる、彼は性來の愛國家て、佛國との戰爭當時には盛に此愛國の熱心に驅れ、ヴヰオンヴィル（七四年）セダン（七六年）等の叙事詩を相次いて公にした、一千八百八十年には小說に筆を染め、古代希臘の藝術的小說『デル、マイスター、ホン、タナガラ』を出し、次て幾多の作があつたが、兎角結構が戯曲的て、多く上滑りがして、內的眞を穿ち入る事が少いとの評があつた、かくして彼は遂に戯曲家として立つに至つた。

戯曲家としての彼は、新帝國の新生活にシラーの高調的ペーソスと、クライストの國民的榮誇心を復活せしめたものと稱せられる、千八百八十一年の『朝

人』を始めとし續々幾篇の作があるが、九十三年の『ハインリヒ及びハインリヒの家族』は二段悲劇として、有名であるし、千九百年の『エラス、マスの娘』は最も好評のあつたものである、彼の戯曲は一般舞臺的効果に富んだものであるが、而も亦生命と活動とが、常に巧妙なる劇術的技術に隨伴し來る點を多とすべきである。

獨逸劇壇がヘッベルやイブセンの感化力の下に壓服されて、觀劇者が從來小說のみに求られた心理的の精微を、舞臺上に期待するに至つて、ウヰルデンブルフの時代は去つた、併し彼は獨逸の劇文學史の創始時代に忘るべからざる一人物で、佛國劇の飜譯や改作のためにのみ忙殺せられ、國民的特色を失つてゐた當時の獨逸劇壇に、自覺心を鼓吹し、國民的自信力を發揮せしめたのは、彼の功績として永へに錄するに足るべきものである、彼は慥かに獨逸劇壇の一老大家たるを失はなかつた、ビューロー公の有力なる評論は彼の死後を飾るべき

柩上の一花環とすべきである。

（その三）　名優コクラン

自分は、昨年の夏ロンドンの『マゼスチー』座で、佛國名優コンスタント、コクランが、モリエルの傑作『タルタッフ』に扮したのを見た、圓熟し切つた藝風で飛切上等の林檎でも味ふやうな、旨い汁が滴りさうに感じた、首をまげて臺辭を廻す工合は、一寸川上音次郎君の大師匠といふやうな趣があつたが、素より音次郎君的の動きの取れぬ、一本調子なのとは自ら異つて居て、轉々として自由自在に變化し、開展する、喜劇俳優としては、慥に一大特色がある名人だと思つた、彼は實に英の故アーヴキングや、墺のヨセフ、カインツ等と盛名を競ふ一人であつた。

このコクランは一月二十七日、突然死去した、千八百四十一年生れの當年正に六十八歳である、父はパン屋で、少時、彼も白い前掛を着て店を手傳つてゐ

た、併し性來の天才は彼を驅つて、舞臺に赴かしめ、千八百六十年にはフランス座の一俳優となり、次第に其技倆を認められてモリエル、レグナール、ボーマルシエ等の作を演じ悉く成功を博した、殊に彼はモリエルに最も通曉し、其諸作に扮して得意の技倆を現はした。

彼は又ガムベッタと親交があつた、かゝる事から政治的趣味をも有してゐた、その中フランス座との間に事情が起つて、彼は斷然サラベルナルドの跡に倣ひ、同座を辭したが、辭表丈はガンベッタの勸告に由り一先づ撤回した、而も彼はこの解放を好機とし、英に遊び、米に航し、世界的名聲を博するに至つた後、四方の勸告默し難く、再びフランス座に立歸つたが、獨立不羈の性格のために、永く足が留まらず又も同座を去り、ルネッサンス座でサラベルナルドと同盟して、劇壇史上の一大紀念的興行をつゞけてゐたが、茲にも兩雄並び立ち難く、千八百九十七年に分離し、ルポート、セント、マーチン座の支配者となり、ロス

タンの『シラノ、デ、ベルジュラグ』を演じ、一世一代の大當りであつた。

今回、そのロスタンの新作『シャンテクレール』を演ぜんとして、稽古の折柄、突然この訃報に接したのは、世界劇壇の一大不幸と謂ふべきである。

（四十二年二月）

（その四）　夏季の劇信

五月末日、伯林の王立劇場は閉鎖され、八月十五日を以て冬季節が新に開かれる、この夏の期間にはレッシング座、新劇場、ウエステン座一流の大劇場も同じく閉鎖されるが、獨逸座、伯林座、シラー座を始め、大半は矢張り休まないで、夏季節の興行をやつてゐる、唯、この夏季節の興行物は音樂劇が大流行て、オペレッテン座では近隣のレッシング座まで借受けて『黃金公子』などを演じつゞけてゐるといふ狀況である、獨逸座邊にまで

も、音樂劇が輸入され、特別劇場には『モントカロの惡漢』などいふ、俗受氣の勝つた作が上場される、要するに、あまり汗の出ないやうな、頭を使はないやうな、氣散じ、暇晴らしを主としたもの許りが行はれてゐる、唯、この間に、新王立オペラで、指揮者ヘルマン、グラの統御の下に、各國、各地方から客俳優が集り合つて、グラ、オペラが催されつゝあるのを一異彩とすべきである。

八月十五日以後、伯林各劇場は眞の活動を始める、王立割場の初週間のプログラムは已に辻々の廣告塔に貼付せられてある、レッシング座では、第四回イブセン、チクルス興行の豫告をしてゐる、ヘッベル座ではヘッベル研究の企てがあるらしい、その他の各劇場もそれ〳〵興行物の撰擇に忙しい。

かゝる際に例の、ウエデキンドは『智惠の石』と題する一齣の、韻文劇を新作したといふ消息が傳へられる、主人公は中世時代の魔術師である、彼

の魔力は『智惠の石』から來るので、世界のあらゆる謎を解いて行くのである、彼は惡魔に憑かれてゐると評判が世間に高くなつて、教會はドミニカン派の聖僧を遣はし、魔術を捨てなければ焚殺の刑に處する事となつた、此聖僧と魔術師と幼時の學校朋輩である、然ういふ關係から、彼の舊友を惡魔の爪から救ひ出さうとして努力するが畢竟無効である、韻文的の技術と描寫とが迅速に動いて例の色情的の作者は、若い生を樂む一處女と魔術師と艶話するの一條に及んで來る、彼は誓つて、其女子を自己の正妻とすると言つてゐる、併し最後には、自己の創造つた一狂人で、件の女子を欺く、自己が『智惠の石』の魔力を保たんが爲である、すると、不思義の矢が飛び來つて魔術師は斃れる、その瞬間、聖僧は再び歸り來つて、今一度、彼の友人をして、神を讃美せしむるやう試みんとする、魔術師はもう死んでゐる、惡魔の弟子等は歡び叫んで、離れ去つて行くといふ處で曲が了る、ファウスト的の着想で、從來此作者の肉慾的乃至諷

刺的の作風から一轉化して、精靈的になりかゝつたといふ評のあるものである、遠からず、伯林の劇場に上るといふ事だ。

今一つ、リヒヤード、ワグナー協會が組織されて、リヒヤード、ワグナー座が新たに伯林のフリードリヒ街頭に新築されんとする事も報導して置く。その協會は一年四マーク宛出金する一千五百名の會員を募集し、四百人の合唱、二十人の高唱者を以て、一座を組織し、ワグネル、を始め新古のオペラを一マーク半、乃至二マーク半位の安價で見るの特權を會員に與へるといふ主旨の下に成つたのである、此が果して計劃通り成効するや、否やはまだ一の問題として喋々されてゐるが、劇場建築の方は、已は其地處迄も確定したのであるから、次第に進行する事は確實である、この會員組織といふやうな方法は、日本に於ても參考すべき點であらうと思ふ。

最後に、獨逸劇界に、新劇を紹介して、始めて新機運を導いたといふ點に於

て有名なる俳優で、兼ねて獨逸座の指揮者たるマックス、ラインハルトと、レッシング座の、イブゼン劇、ハウプトマン劇の重要なる役に扮して名聲嘖々たる女優、エリザ、レーマンとの訴訟事件を記して置かう、エリザ、レーマンは、千九百〇五年に、獨逸座の指揮者たるマックス、ラインハルトと興行契約を結んだ、それは來る千九百〇九年九月一日より千九百十四年八月まで、レーマンが獨逸座に出演するに就き、一ケ年に六ケ月の出演期間とし、此に對して三萬マーク、即ち百二十夜として、一夜毎に二百五十マーク、若し、此れ以上に超過した時は一夜毎に二百マーク、支拂ふといふ契約をした、ラインハルトは其際、レーマンに向ひ『ナア、エリザ、これは眞實の、ソルマ契約だよ』と云つた、即ち、例の大女優アグネス、ゾルマと同格だと云つたのである、然るに、後に至つて、アグネス、ゾルマは一夜、五百マーク宛を得てゐたといふ事實が現れた、レーマンは、ラインハルトが自分を欺いたといふ點で、訴訟を提起したのであ

る、獨逸第一流の俳優の、給金が知れるから、此も日本への參考にならう。

（四十二年八月）

ザーニスト

此の頃、伯林の方々の書肆の店頭に「ザーニン」と題する露國小說の飜譯物が列べてある、新聞、雜誌でも一廉の評判になつてゐる、露國では非常に讀書界を動かしたもので、而も發賣を禁止されたのである。この著者は、獨逸邊りではまだあまり知られてゐないが、露國の敎育ある社會には遍く知己を有する少壯作家アリツィバセフである、「ザーニン」は作中の主人公の名で、由來、政治的革命運動に狂奔してゐる露國々民をして、其注意を一時、非政治的方面に廻轉せしめた程の大魔力を有する者として、嘖々せられてゐる、智識的社會は、この作に鼓吹せられて、自由戀愛の熱狂者となり、青年の間にザーニズムが唱導せらるゝと同時に、高等敎育ある女子間にも「自由戀愛倶樂部」の成立を見るに至つた。